マレビトの楽園

山下しんか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
マレビトの楽園

【Ｎコード】
Ｎ４６７０Ｚ

【作者名】
山下しんか

【あらすじ】
ふと気がつくと、幸田命司は見知らぬ廃墟に居た。それまでは、ごく普通に貧乏生活を送っていた苦学生だったハズなのだが。
天をあおぎ見ればうららかな日差し。
目の前には狐顔の人物と、ロリ巨乳でとがり耳の少女。
そして、デカい氷に包まれている自分。
凍えそうな寒さの中、それまでの経緯を思い出した命司は、どうやらここが異世界である事を理解する。
秘法と呼ばれる超常の力が当たり前にある面白そうな世界で、命司

はしかし莫大な借金を背負わされ、なし崩し的に目の前の二人の元で働く事となるのだが……。

※短編と連載間違えてたので再掲しました。ご迷惑おかけして申し訳ありません。

序章　狐男と妖精女

？？そう、貴方は言霊使いなのですか？？

？？ふふ、ひどい世界なのですね、そちらは？？

？？なら、いっそこちらにいらっしゃいませんか？　良いところですよ、こちらは？？

？？分からない？　そう、貴方には分からないかも知れませんね？？

？？でも大丈夫。私が、まるで貴方の意志であるかのように、導いて差し上げますから？？

？？私？　私の名は？？

◆　◆　◆

気がつくと、幸田命司は瓦礫に埋もれるようにして、椅子に座っていた。

頭上には抜けるような青空が見えるが、そこはまぎれもなく建物の中だ。瓦礫は、倒壊した装置と屋根、それから壁の一部。そして、その瓦礫の山の中にはテーブルと椅子があり、差し向かいにはついさっき出逢ったばかりの女たちの顔がある。

一人は真紅の髪の妖精っぽい少女。

そしてもう一人は、モロにキツネ顔で立派な尻尾まで生やした姉似の人物。

現在、命司はどういうワケか、氷の塊の中から顔だけ出しているという異常な状況にある。

他方、『彼女たち』に視線を向け、こうして陽の光の下で見てみると、一人??姉かと思ってしまった者は、似てはいるが、どうも違う様子だと思えた。狐のような頭上の耳はたまに動いているし、面差しも姉より中性的だ。着ている服は、日本の神主が着ている狩衣みたいな感じで全体が緩やかだが、それでもその体格は男っぽい気がした。

そしてもう一人??女の子、と思った人物も、尖った耳が時折動くし、チャイナドレス??というより、ベトナムのアオザイみたいな服に、その小さな体躯を包んでいる。どれを取っても目を引くが、その小さな背丈に比して胸が大きいのが、何よりも特徴的だ。

（ロリ巨乳……）

思わず、そんな四文字が命司の脳裏を掠める。

そんな命司の視線を感じたのか、女の子は汚いものでも見るかのような視線を向けて、胸元を両腕で隠した。

と、不意に姉似のキツネ顔が話しかけてくる。何語かもさっぱり分からない言語で。

だが、言葉は分からないものの、一つだけ確信した事がある。キツネ顔の声質は、女のものではなかった。つまり、少なくともそのテの方々から男寄りの存在だろうと思う。とはいえ、まだ明確には分からないが。

ただ、どちらにしてもこのままでは埒があかない。いずれにしてもコミュニケーションは大切だ。そう思い、命司は口を開いた。

「いや、分かんないって。つか、もし万が一姉貴のイタズラとかだったら、マジで許さないからな？」

いくら天才でオタク趣味で『腐』属性を持っているどうしようもない姉でも、多分ここまで凝ったイタズラはしないハズだ。そうは思っていても、命司はあの姉に関しては、いつでも『万が一』を考えてしまう。

すると、キツネ顔はしばし考え込み、やがてどこから出したものか、一本の細く尖った氷みたいな棒を手にした。それを鉛筆のよう

に持って、命司の顔に近づけてくる。
「お、おい、何する気だよ？」
ゆっくりゆっくり、テーブルに身を乗り出して命司の『眼』に、その尖った先端を近づけてくるキツネ顔。命司は何をされるか分からない恐怖を感じつつも、精々が顔をそむける事しかできない。
が、それも？？
「うわぁ！　や～めぇ～ろぉ～！」
命司は思わず叫んだ。いつの間にか背後に回った女の子が、その小さな体躯からは想像もつかない怪力で、命司の頭を固定したのだ。
左目に迫る棒の先端。その恐怖に耐えきれず、命司は両目を固くつむった。すると、
（なんか……書いてる？）
ひんやりとした、細く固い感触が瞼の上を走り回る。固い先端で書かれているので微かに痛むが、痛みを与えるのが目的ではなさそうだ。そして、両の瞼が終わると、今度は左右の耳たぶをなぞっていく。それから耳が終わると、今度は唇から顎、喉にかけてなぞっていった。
そして？？
「おい、聞こえとるか？　言葉分かんねやったら、眼ぇ開けてみぃ」
そんな声が聞こえ、同時に頭の固定が解かれた。
（か、関西弁？）
命司はゆっくりと瞼を開いていく。
「やった！　さっすがマイスター！　だ～い成功～！」
右手すぐ傍から、今度は女の子が理解出来る言葉を紡いだ。
「ねぇねぇ、キミ、どこから来たの？」
女の子はテーブルに上半身を乗せると、命司の顔を覗き込んだ。長く、そして尖った耳の先が、好奇心を表現するように上下に動く。着ている物はアジア風だが、その姿は命司に西洋の妖精を連想させた。
だが、

「しゃしゃり出てくんな、このロリが」
不意にキツネ顔はそう言うと、女の子を一睨みする。そんな狐男の様子に、女の子は不満そうな表情を見せた。
「ロリじゃないよぉ。マイスター、あたしが二十三だって知ってるじゃん」
「そのナリで言うても説得力皆無やろが。とにかく黙っとれ。やっと話通じるようになったんや、脱線さすな」
どうしてか不機嫌な様子の狐男。精々が小学六年生程度にしか見えない傍らの女の子が、二十三歳だという事も驚くが、それ以上に、今にも掴みかかってきそうなこのキツネ顔の態度の方が命司は気になる。もっとも、なぜ不機嫌なのか。その理由はこの廃墟を見れば、おおよそ理解出来る気がするが。
「まぁええ、取り敢えず名前からや。俺はユート。ユート・ユーゼン。で、こっちのロリガキは、サラ・アフメドや。お前は？」
不機嫌ながらも、しかし理性的な雰囲気を滲ませて、その狐男？？ユートはそう訊いてきた。
「違うから！　ロリじゃないから！　結婚できる歳だからねあたしは！」
ロリガキ？？もとい、サラが横から口を挟む。が、再度ユートに睨まれて口をつぐんだ。
「え～……命司……幸田……命司っす……」
取り敢えず、氷漬けになって身動き取れない身の上だ。不思議なことに氷は解けてこないのだが、寒い事は寒いので、早く解放して欲しい。そんなワケで、命司は素直になるのが得策だと思った。
「エーメイジ・コーダ・メイジッス、か。アホっぽい名前やな」
言って、ユートはいつの間にか取り出していた手帳に、命司の名前を書き連ねていく。しかし不思議な事に、初めて見るその文字も、命司はどういったものかが理解できた。漢字に近いだろうか。表音文字ではなく、明らかに表意文字のようだ。それも、原始的な漢字？？歴史や国語で習った『甲骨文字』とかいうものに近い。

とまぁ、それはひとまず置いておくことにして、命司は取り敢えず誤りを正さなくてはならない。
「いやいやいや、違うから。俺の名前は『命司』で、苗字は『幸田』。ワカル？」
命司がそう告げると、ユートは顔を上げて命司を睨みつけた。秀麗だが、そのキツネ目が姉を連想させ、気圧されてしまう。
刹那、
「ぐあっ！」
ユートが投げつけたペンが額に突き刺さり、命司は悲鳴を上げた。
「あ～あ。今マイスター機嫌悪いからさ、ハキハキ答えた方がいいよ？」
さんざんユートに罵倒され、反論する度に睨まれたせいか、サラ（二三）までもが冷めた視線を送ってくる。
そして、投げて刺さったペンはそのままに、ユートは新しいペンでさっきのメモを修正していた。
「……で、メイジ・コーダ君よ。お前、どっから来たん？　ったく、人様の高価な機材破壊しよって。くだらん答えやったら、そのままダ＝インのカルデラ湖に浮かべたるからな？」
「沈める、じゃないの？　マイスター」
「氷は浮くやろ。まぁ見ててみぃ。ひっくり返って、頭だけ水に浸かんねんから。……もがき苦しむ様が目に見えんで」
「やぁん、コワイ～！　マイスターったら鬼畜ね～！」
虜囚そっちのけで、空恐ろしい会話をしている方々。だがそれでも、聞こえる会話の内容から、元の世界と物理法則は似ているようだと命司は思った。
「え～と、俺はデスね……」
ここはもう、洗いざらい話すしかない。せっかく姉や現実世界から逃げてこれたのに、ここで死んでは無駄死にだ。

一章　実の姉貴と世紀の実験　０１

それは、いつの記憶だろうか。
命司の目の前には、だいぶ前に死んだ祖父の姿が在った。
人の良さそうな細い眼差し。命司の容貌は、まぎれもなく祖父譲りだ。
浄衣に身を包んだその姿。祖父は田舎の神社の神主だった。そんな祖父に、命司は色々な事を教わった。その中でも、とりわけ？？
「そうかそうか、イジメられたか。まぁ、そんなに気にするな。人はな？　自分の下に誰かがいないと気が済まんのよ」
蝉時雨の中で、泣きじゃくる命司を膝に抱き、本殿の階段に腰掛ける祖父は、命司の頭を撫でながらそう言った。
「そんなのヤだよ！　ボク、悪い事してないもん！　どうしてボクがイジメられるのっ？」
人生という名の苦行競技会にエントリーしてから五年目ほどで、初めて経験した理不尽。それを承服できる術も、理解できる道理も、幼い命司は持ち合わせていない。
「それに耐えられんのだったら、じゃあ、お前が強くなるしかないなぁ……幸い、お前は声に力がある。その使い方を、祖父ちゃんが教えてやろうか？」
「……ちか……ら？」
泣くのをやめて、命司は後ろの祖父の顔を見上げた。
「古来、日本には言葉に魂が宿ると信じられてきた。それを『言霊』という。祖父ちゃんはな、その使い手なんだぞ？」
何を言っているのかなんて、幼い命司には半分も分からない。でも、それがあるなら。それができるのなら、大好きな、祖父のように？？
「そうしたら……いじめられない？」
「それは、お前が正しく使えたら、な。……祖父ちゃんの言うこと

守れるか？」
「うん！」
命司が力強く頷(うなず)くと、祖父は愉快(ゆかい)げに、そして嬉しそうに笑った。

一章　実の姉貴と世紀の実験　０２

◆　◆　◆

意識が、浮上していく。
懐かしい祖父の姿は遠く消え去り、
「じい……ちゃん……」
現実が、ふいに命司を包んだ。
（どこだ、ここ……？）
ぼやけた視界がハッキリとしてくると、命司は自分が金属製で円筒形の小部屋に入っている事に気付いた。いや、『入っている』、というよりは、『詰まっている』という表現がより正しい。さらに言えば、『詰まっている』のではなく、『詰め込まれている』という状況なのだが。
体育座りで手足の伸ばせない狭さの中、視線の高さよりも少し上に、明かりの射し込む窓がある。膝が壁につかえて伸ばせない両足の代わりに、命司は両腕を床に突いて、身体を微かに持ち上げた。
そして、その先に見えたもの？？いや、見えた『者』は？？
（やっぱりか）
そこにいたのは、数人の白衣の男と、林立する機械の群。そしてその中心に堂々と立つのは、誰あろう命司の姉の安和だ。命司の八つ年上で二十七歳。だが、既にその社会的地位は確立されている。狂徒大学教授であり、世界でも屈指の量子物理学博士。それが命司の姉だ。
性格も顔立ちも、正に『雌狐』といった形容がぴったりの女。
実家の借金苦を物ともせずに、自分だけ密かに家庭教師のバイトで金を貯め、奨学金で大学を出て、この若さで博士にまで登り詰めた。紛れもない天才であり、それだけなら尊敬にも値する。の、だ

が？？

「あら、オハヨー、マイブラザー」

安和の口が動くと同時に、頭上のスピーカーから声が聞こえた。

相手はバイト先の客ではない。命司は遠慮なく怒りを爆発させる。

「テんメェ～っ！　また拉致りやがってゴルアァァァ！　俺を何回テメーの実験材料にすりゃ気が済むんだよ！」

そう、この状況と酷似した状況に、命司は何度もさらされてきた。

安和の研究は『量子テレポート』。昔のハリウッド映画で、『ハエと合体しちゃう博士』が研究していたテーマだ。

そしてこれまでに、それに付随する人体実験の材料として、命司はムリヤリ『貢献』させられてきた。

正体不明の新薬を注射されたり、

身体の一部を量子化されたり、

この間も、『並行宇宙』とやらの誰かと脳内文通させられたばかりだ。

「素直じゃないなぁ、マイブラザー。いい？」

口の端を歪め、安和は右手人差し指を立てて、左右に振ってみせた。

「今回は、記念すべき最後の人体実験。その被験者にキミは選ばれたんダヨ？　この超天才量子物理学博士・幸田安和様のネ！」

額に浮かぶは怒りの証。姉の超絶自己中発言に、命司はとうとうキレた。

「コーダアンナサマノネ！　……じゃねぇこのマッドサイエンティストが！　いいか？　俺はこれからバイトなんだよ！　さっさと解放しやがれクソ姉貴！」

「ああ、ヒドいわマイブラザー。せっかく、何の取り柄もない平凡な専門学校生のアンタが、歴史に名を残せるチャンスを与えてあげてるのに……姉さんの愛を拒絶する気？」

手弱女っぽく身体をくねらせ、わざとらしく涙を見せる安和。その態度も気に入らないが、何よりこんなヤツと姉弟だという事が、

命司は一番許せない。
「ああ！　ああ！　確実に名前残るだろうよ！　量子テレポートだかの、世界初の事故の犠牲者だって事でな！　つか、頼むから俺で実験すんのはヤメてくれ！　マジで俺は忙しいんだよ！　ったく、オヤジ達の借金苦から、テメーだけ勝手かつ華麗にフェードアウトしやがったクセに！」
嫌味、懇願、ついでに恨みの文句を並べ立て、命司は狭い窓にべったりと頬を押し付けて姉を睨んだ。
「身内だからいいんじゃな～い。他人だったら万が一の時、人道的に問題あるでしょ？　それに、親の借金で子供が苦しむのは理不尽だわ」
しらっと涼しい貌で、安和は微笑んで見せる。
知らず、命司の額に数本の青筋が浮き上がった。
「身内の方が問題あるよボケぇ！　つか、マジやめろよ！　マジでバイトあんだって！」
猛り狂う命司。だが、安和の次の言葉が命司を一瞬唖然とさせた。
「ああ、今日行けないって連絡しといたし。それに、これでも姉として、あんたの将来心配してんのよ？　その歳でスデに負け組に片足突っ込んでるアンタを、あたしが人類の未来の為に役立たせてあげようと思ったんじゃな～い」
唖然とした状況から、再び額に浮き上がる血管の群。それは一瞬で強度限界を超えてしまった。命司の額から一筋赤いものが吹き出し、覗き窓をステキな赤色に染めていく。
（こんのアマあああぁぁぁ……！）
社会に出て、何度も何度も耳にし、何度も何度も浴びせかけられた言葉、『勝ち組』『負け組』。それをこの期に及んで、実の姉から浴びせられるとは。
「大きなお世話だこのヤロウ！　まだ負け組だって決まってねぇだろが！　つか、身内ならオヤジ達の借金なんとかしてやれよええっ？　勝ち組様よぉ！」

そう吠えつつも、しかし命司は姉の立ち位置??その一点だけは分からない訳でもなかった。元々、宗教にハマった叔母の保証人になった、お人好しの親父が悪いし、マヌケな話だとも思う。そのせいで、祖父の死後に相続した神社は人手に渡り、当の両親は外国に出稼ぎ中で、一家離散状態なのだ。

だがそれでも、姉の態度は身内として許せない。

命司の剣幕に、安和は苦笑を浮かべた。そして、直後にそれは嘲笑へと変わる。

「やれやれ……ったく、だからアンタは負け組脳だってのよ。いい？　この実験が成功したら、どんだけの金が入ってくるか分かってる？　ハッキリ言って、ザックザクのウッハウハよ？」

安和の言葉は正論には違いない。金持ちになれる。その可能性も否定はしない、しかし、それでも譲れないものが命司にはある。

（だからって、弟で人体実験していいってコトにはならないと思いマスよ？　オネエサマ？）

命司の一番身近な存在に、金に取り憑かれた亡者がいたという訳だ。そして、社会の『底辺』を知っている命司としては、大金持ちという存在は遠く、なりたいとも思わない。命司はただ、日々の暮らしに困らない程度、更に言うのなら??

「知らねぇよ！　分かりたくもねぇし！　俺は学費稼ぎたいだけなんだよ！　分かったらサッサと俺を帰せブス！」

憤懣を言霊に乗せ、命司は放った。

だが、命司の不用意な罵詈雑言に、安和は刹那、不敵な笑みを浮かべて見せた。

そんな姉の貌を見て、命司は思い出した事がある。嫌な汗が額から頬を伝って落ちていく。

（……そうだ、姉貴、言霊に耐性あったんだった）

過去に数回試した結果、安和は命司の声の力『言霊』の存在に気付き、命司の言葉に身構えるようになった。つまり、最初から気構えを持って聞けば、命司の言霊は効力を失う。その程度の能力なの

だ。
　そして、放った言霊は案の定、姉には全く効かず、それどころか、むしろ彼女の感情を逆撫でする結果となった。
　安和は額に青筋を浮かべると、周囲の助手達にその笑顔を向けた。
（ヤバイヤバイヤバイ！）
　満面の笑みで、助手に何事かの指示を出す安和。その貌の下には、明らかに弟への怒りが埋まっている。
「んじゃ、さっさといっちゃいましょーか」
　刹那に唸る機械群。
「お、おい、マジやめろよ……」
　不安と恐怖が入り交じり、命司の口からこぼれて落ちた。だが、実弟の懇願にも姉の笑顔は崩れない。
　安和は命司に向けて口を開いた。まるで、不安な幼子を優しくあやすかの様に。
「ダイジョーブだって。犬とネコは戻ってきたから。……ミルクしか飲まなくなっちゃったけど」
「ダイジョーブじゃねぇよソレ！　幼児退行してんじゃねーか！　つか、人格崩壊するかもだろソレ！」
「ダイジョーブだって。ジューブン微調整繰り返したんだからぁ」
「ダイジョーブじゃねぇよ！　微調整でなんとかなる問題じゃねぇからソレ！　つか、ハエとか一緒に入ってねぇだろうなっ？」
「あ、さっきカマドウマみたいの入ったかも。まぁ、いっか」
　通称『便所コオロギ』のセクシーに黒光りするあの背中を想像しながら、命司の全身に戦慄が走った。
「どうせならバッタがいいです！　是非バッタにチェンジして下さい！　それも今すぐ！」
　錯乱、いや狂乱し、命司の口をついた的外れの最後の懇願？？というより、むしろ哀願も？？
？？姉の笑顔には届かなかった。
「……んじゃ待ってるわよ？　愛しのマイブラザー」

ウィンクと共にキスを投げてくる姉。
鳴動する機械群。
やがて、命司が入っている機械の中に、淡(あわ)い光が満ちてくる。
光は粒子(りゅうし)となり、それが、元々自身の身体を構成していたものだと悟(さと)った時？？
「テんめぇぇ！　憶えてろゴルアアァァァ……」
そう言い置いて、命司の意識は遠のいていった。

一章　実の姉貴と世紀の実験　０３

◆◆◆

（……ここどこ？）

気が付いた時、命司は『そこ』にいた。

そこは、広い円筒形の部屋。いや、部屋かどうかも分からない。ただ、命司の周囲には、まるでモニター画面のようなものが、無数に浮いている。それらは、特に機械のボディを持っている訳ではない。あくまで、液晶モニターから『画面』だけを抜き出したかのようのものが、厚みを感じさせずに浮いているだけだった。

近くのものを観察すると、それらはまるで、ドラマの一シーンを放映しているかのように常に動いている。

壮大な自然、

巨大な異形の生き物、

一見すると人間に見えるが、ツノやシッポの生えた何か。

違う画面を見る度に、違った景色が見えてくる。

今の人類よりも、遥かに文明が進んでいるかのような都市が見えたかと思えば、

まるで石器時代の建物ばかりの集落が見えるものもある。

「……なんなんだ、ここ……」

ひょっとすると、以前から念願だった、宇宙人に拉致されたという状況かも知れない。そう思ったが、自分以外に誰も見えない場所で、それを示す証拠も何もない。

命司はしかたなく、画面の一つに触れようとした。と、その時？？

（そこでいいのか？）

そんな自問が湧いた。

「……つったって、他にできそうな事無いし……どうやったら、元

の場所に戻れるんだ？」
ただ独り、自答を返す。
（戻りたい？　戻りたいのか？）
刹那の自問。気が付けば、目の前の画面には、姉・安和が慌てふためいている姿が映っていた。
「ハハ……バカだなアイツ。なに今さら慌ててんだよ……どんだけ自分の技術、過信してたんだ……？」
がっくりと項垂れる安和の様子に、あんな姉でも心配してくれてるのか、と、そう思った時？？
安和は指を鳴らすと、助手達に指示をして室内の照明を落とし、そのまま彼らを率いて出て行った。
「……ク……ククク……」
思わず、笑声がこぼれた。
そういえばそうだ。躊躇なく弟で人体実験を繰り返してきた姉が、今更こんな事で、嘆き悲しむハズがない。あの去り際に見えた苦笑は間違いない。これまでがそうだったように、どこかの居酒屋で『反省会』という名目の飲み会を開くつもりなのだ。
「まぁ、仕方ねぇな。こうなっちまって、今さら元の世界に未練はねぇ」
冷徹にそう呟くと、同時に命司の周囲に漂っていた画面が、命司の周りを高速で回転し始めた。
（じゃあ、どうする？）
再度の自問。
「そんなもん決まってる。或る意味、姉貴には感謝してるさ。これは、またとないチャンスなんだからな」
（元の世界に未練はないのか？）
続いた自問に、刹那、様々な顔が脳裏に浮かぶ。

父と母。
友人達。

バイト仲間。
そして、大好きだった祖父。

だが、
それでも、
この欲求を止められない。

物心付いた時には、既(すで)に狂っていた国。
そこから更(さら)に、止めどなく狂っていく世界。
『力』を持つ者達の果てしない欲望の中で、
見えない何かにがんじがらめにされている『力』無き者達。

そして、その『力』無き者の一人でしかない自分。
世界は??少なくとも、『命司が知っている範囲の世界』は、命司に居場所を与えてくれなかった。
大多数の有象無象(うぞうむぞう)として、ある日突然消えてしまっても、誰も気にも留(と)めない。そんな存在でしかなかった。

「だから俺は??俺に居場所をくれる世界に行く」
そう覚悟(かくご)が決まった刹那(せつな)、
十数個の画面??『世界』が命司の周囲に固定された。
そして、その中の一つ、真正面に在るそれに命司は手を伸ばす。
(死ぬかもしれないよ?)
「分かってる」
(二度と戻れないかもしれないよ?)
「望むところだ」
(行った先にも、居場所なんてないかもしれないよ?)
その自問に、指先が一瞬止まる。
だが??
「……少なくとも、元の世界よりは希望があるさ」

再び動き出す指先。その指先が触れると、画面に波紋(はもん)が広がり？？？

？？？命司はその中へと引き込まれた。

一章　実の姉貴と世紀の実験　０４

命司の意識に、徐々に感覚が戻ってくる。
（……狭いな）
最初に感じた、そんな感覚。どうも、またしても何かの装置に入っているようだ。
（ああ、さっきのって、やっぱ幻覚か……眼ぇ開けると、あのクソ姉貴がいるんだろうな）
成功だ！　とか騒ぎながら、しかし弟の事はほったらかしで、助手達と抱き合って互いに喝采を送り、打ち上げに行きかけた所で、実験装置内の弟の存在に気付き、ようやく解放してくれる。そういうパターンだろう。
そんな事を考えながら、命司は徐々に眼を開いていく。
そして、視界がひらけたその時？？
（……やっぱりね）
寂寥の想いと共に、そんな感慨が胸中に去来した。
目の前、透明な壁越しに、キツネ顔が在った。
（オイオイ、何考えてんだ？　コイツ）
思わず、命司は呆れ果てた。
いつもの姉のキツネ顔。のハズが、ちょっとばかり違っている。
頭に載るは、まんま狐を連想させる耳。いつもの天然黒色の髪にまで工夫を凝らしたようで、髪は金色に輝き、綺麗に櫛を通された様子のそれは、左右をボブカットの様にして、後ろは短いポニーテールを作っていた。
新鮮ではあるが、カワイイつもりなのか？　と、面と向かって問いたくなる。

◆◆◆

そして、姉貴ご自慢の優秀な助手達。
（……達？　あれ？）
命司は室内を見渡した。だが、複数いたハズの助手は、そこに一人しかいなかった。
（こんな助手、いたか？）
それは、小さな女の子。
先の尖った長めの耳と、真紅の髪に施した、左側で結った肩までの長さのサイドテール。特徴的な、くりっとした大きな丸い眼差しが愛嬌たっぷりだ。
そんな彼女たちは、まるで実験の成功が信じられないかのように、微動だにせずに両の眼を目一杯に見開いて、命司を凝視していた。
刹那、命司は突然に息苦しさを感じた。どうやって入れたものか？？いや違う。テレポートしたというのなら、入り口は必ずしも必要ではない。それは分かるが？？
「おい！　開けろよ！　マジで殺す気かこのクソ姉貴！」
いよいよ酸欠がひどくなり、命司は自分が入っているガラス容器を叩いた。
だが、目の前の二人は顔を真っ青にして、必死にかぶりを振りながら、両腕を交差させている。『やめろ』というジェスチャーらしいが、しかし、切羽詰った命司はそれに従うつもりも無いし、何より姉の機材なら遠慮はいらない。
意識に霞がかかり始めた時？？
（こ、の、クソッタレがあああぁぁぁぁ！）
？？命司は全身に力を込めて、両手足を突っ張った。多分、これで容器を破壊できなければ酸欠で死ぬ。
と、不意に眼前にヒビが走り、その容器の三分の一が割れ砕けた。
「ぶはぁっ！　……ザマミロ姉貴ぃぃ……イヒヒヒヒヒ」
これまで受けてきた仕打ちでテンションが上昇しまくり、不気味な笑声がこぼれる。
ゆっくりと新鮮な空気を吸い込みながら、命司は床に降り立つ。

ひとまず危機は脱した。あとは、どうしてか額に青筋を浮かべている『姉貴コスプレバージョン』に、怒りの鉄槌を下すだけだ。「女に手を上げるなんてサイテーよ！」などと言ってくるだろうが、そんなものはカンケーない。

「往生せぇやあああぁぁぁ！」

命司は『姉貴獣耳バージョン』に飛びかかった。

が？？

瞬時に傍らの女の子が間に入ったかと思った時、

「かはっ……」

前方斜め下から、命司の腹を突き上げるように、ハイキックが刺さっていた。一瞬で呼吸が停止し、女の子が避けた場所にカエルのように落ちる。

（こ、このガキぃ）

呼吸困難で身体を丸めながら、視線を件の二人に向けると、頭上では、彼女たちが奇妙な言葉で会話している。

と、突然命司の後ろ？？ちょうど、命司が入っていた容器の在る方から轟音が聞こえた。それは、何かが倒壊する音。砕け、飛び散り、連鎖的に破壊音が大きくなっていく。そして、今いる建物の屋根までが崩れ？？

（ヒイィィィ！）

？？命司の上に降り注いだのだった。

一章　実の姉貴と世紀の実験　０５

◆　◆　◆

「……とまぁ、そーゆーワケだ」
小一時間後、概略を全て話し終えた命司の前では、ユートとサラが腕を組んで考え込んでいた。
「……じゃあ何か？　メイジ、お前はこの世界の住人ちゃう、いう事か？」
「え～？　どう見ても西の白の国の人だよこのコ」
「信じる信じないはそっちの勝手。俺は嘘は言ってない。……つか、そろそろここから出してくんない？　凍死しちまうよ」
氷漬けにされてから、かれこれ一時間強。言葉通り、そろそろ命司の身体は小刻みに震え、唇が紫になっていた。
「まぁ、せやな。取り敢えず……」
微かに頷いて、ユートはテーブルに身を乗り出すと、命司を包んでいる氷の右側に、左手で軽く触れた。と同時に、その部分？？腕一本分ほどが解けて流れ落ちた。
「おお！　……って、右腕だけ？」
自由になった右腕。そこだけが、急に外気の熱を吸収し始める。
「まぁ、その間抜けっぷりはちゃう思うけど、俺の属性宝珠狙うとるヤツかも知れへんからな。取り敢えず、サインだけできるように右腕だけ解放したったわ」
言って、ユートは何やら数枚の書面を命司の眼前に提示した。
「……あの、これ？」
命司が訳も分からずそう訊ねると、
「借用証と、契約書、それから、住民台帳登録出願書や」
面倒くさそうに、ユートは一枚一枚そう説明した。

「……はぁ？　……ハナシ、見えないんだけど……借用証？　って、俺が何を借りたんだよ？」
何か『胡散臭さ大爆発』な展開に、命司は思わず身構える。叔母も、こんな調子でなし崩し的に宗教に引きずり込まれたのだろうか。などと、今まで考えもしなかった事が脳裏を過ぎった。
が、その刹那、ユートは額に青筋を立て、椅子から立ち上がった。
「……あんな？　せっかく錬金術の機材一式自腹で揃えてやな、依頼された希少金属練成してたとこにやで？　どっかのバカが転移してきやがったっちゅうワケや。で、何トチ狂ったんか知らへんけど、機材ん中から飛び出して、機材一式見事に全部破壊してくれてやな、オマケに天井にまで大穴開けやがって。せやけど心の広い俺様はやな、その身寄りの無い正体不明の馬鹿野郎をワザワザ手元に置いてやなぁ、破壊された機材の代金と屋根の修理費用を全額返済するまで、俺の下で働かせてやろうっちゅうとんねん、分かったか？　この……クソマヌケ野郎がああああぁぁぁぁっ！」
両眼を見開いて、目を血走らせ、思いっきり叫んだユートは、深呼吸するとそのまま再び腰掛けた。
（ん～、まぁ、もっともな意見ではあるな。だけどなぁ）
確かに、今の命司には頼れる存在などどこにもいない。借金を負わされる理由はもっともだと思うし、それを返済するのにタダ働きするしかないのも仕方が無い。が、その際に聞いておかなければならない事もある。
「え～……全額返済するまで、どのくらい、かかりそう……かな？」
額に刺さっているペンを引き抜いて、サインの体勢に入ると、しかし命司は手を動かさずにそう訊いた。
「……さぁ？　お前の働きと、あとは幸運次第ちゃうか？　ちなみに俺は、その額貯めんのに五年かかったけどな」
不機嫌も顕わにユートがそう返し、今度はサラがそれを補足する。
「ちなみに、マイスターは秘法師で収入もハンパじゃないから。キミがこれから下働きするだけなら、一生かかっても返せないんじゃ

ないかな？」
（ああ、それはつまり、一生を奴隷で過ごせと）
「……なる、ほど、ねぇ……」
呟きつつ、命司は三枚の書面全てにサインした。
「さ、これでいいだろ？　早く出してくれ。凍えちまうよ」
言ってユートに書類を手渡す。
それを受け取ると、
「……まぁ、ええやろ」
ユートは命司の傍に立った。
そして命司を呪縛する氷の塊に手を触れる。直後、それはまるで、解けて水になる過程を飛ばし、一瞬にして気体にでもなってしまったかの様に消え失せた。
と同時に、命司の身体に熱が戻ってくる。不思議な事に服は少しも濡れていない。頭上にぽっかりと開いた天井の大穴からは日差しが照りつけ、命司の身体を温めていく。
（う～ん、変温動物の気持ちが良く分かるな。生きているってスバラシイ！　その上で、借金なければもっとスバラシイんだけどな）
命司は、こちらに背中を向けてサラに何事かを指示しているユートを一瞥する。
「下行って、コイツに合いそうな着替え持って来ぃ。俺のでええで？」
「あいあい！　マイスター！」
サラは元気良く敬礼して見せると、そのまま階下へと続く階段を下りていく。
（チャ～ンス到来！）
ユートは今、背を向けている。サラはいない。そして、命司は天井から壁まで続く大穴にそっと近づくと、下を覗き込んだ。高さは精々三メートルほどか。降りられない高さでもない。
もう一度ユートを見てみると、ユートは再度書面に目を通している。時折耳が微かに動き、立派な金色のシッポが揺らめいている。

どうやら、完全に油断しているようだった。
と、
「マイスター！　マイスターが学生の時に着てたコレでいいかなぁ？　何着かあるから選んでもらうね～！」
そんな声が階下から聞こえ、階段を上がってくる気配があった。
（今だ！）
命司は壁の穴を乗り越えると、そのまま飛び降りた。
「あれ？　マイスター、メイジ君は？」
「……あ？　ああっ？　野郎！　逃げやがった！」
そんな会話が頭上から聞こえてくる中、命司はダッシュした。
（さ～て、この後どうすっかなぁ～）
取り敢えず、間抜けな借金取りからは逃げる事ができた。が、問題はこの後だ。
眼前に広がる、いつかのテレビで見た様な、中国あたりの伝統的な町並みに似た風景。街路を疾走（しっそう）しながら、どこかに隠れられる所はないものかと探す。
大通りから一本奥の平走している道に入り、命司はひとまず物陰（ものかげ）に隠れる事にした。

一章　実の姉貴と世紀の実験　０６

◆　◆　◆

「あの恩知らずがぁ～……！」
命司が逃げるのに使ったと思われる壁の穴。そこから外を覗きながら、ユートは拳を握り締めていた。
「まぁ、いいんじゃない？　マイスター。どっちにしたって、あの子じゃお金にならないよ。それに、あたしがいるじゃん」
そうサラが言うと、ユートはサラの奥襟を掴んで持ち上げ、テーブルの上に置いた。
「アホな事言うなや。ええか？　アイツの話が本当なら、この世界とちゃうとこの、異境の人間やで？　錬金術の機材一式の代金なんぞ、話にならんわ！　国共大の学者どもに価値刷り込んでやな、研究素材として売りつけたんねん！」
「でも、逃げちゃったよ？　どうするの？」
「お前は城門のとこで見張っとれ。俺はセイバー仲間にそれとなく連絡しておく」
言って、ユートはメモ帳にメイジの似顔絵を手早く描いた。
「似とるやろ？」
横線四本で眉と目、縦線一本で鼻、その下に口の横線。それに輪郭と髪を足すと、不思議な事に、メイジの似顔絵が出来上がる。
「ぶふっ！　うんうん！　そっくり！」
サラはケラケラと笑い出す。
「よし、んじゃ、これ持って行け！」
「あいあい！　いってきま～す！」
サラは手帳を破って渡された似顔絵を上着のポケットに仕舞い込むと、メイジが逃げ出した壁の穴から飛び降りて走っていった。

「……しばらく、美味(うま)いもんも食えへんな……さて、端末(たんまつ)端末、と……」

ユートは一つため息を吐くと、瓦礫(がれき)を掘り返し始めた。黄色の属性を利用した、遠隔地(えんかくち)同士のコミュニケーションツールが、この世界にはある。金属鏡の形をしたそれを使って、同業者と連絡を取るつもりだった。

一章　実の姉貴と世紀の実験　07

◆　◆　◆

夕方になる頃、命司はようやくその場所に辿り着いた。

「ぐえ……マジ広ぇ街だ。喉乾いた……腹も減った……何より疲れた……」

息も絶え絶えに呟きながら、命司は物陰から『それ』を見上げる。

命司の目の前には、巨大な門があった。楼門、とでも言うのだろうか。横幅は門を貫く大通りよりも広く、その高さは三十メートルを超えている様に思える。何階かの階層構造になっているようで、土壁の途中途中に四角い窓があり、屋根はこの街の一般家屋と同様に、瓦屋根のように見えた。基本的な造りは町並みを構成する家々と大差ないが、その材質や作り込み加減は、民家とは比べ物にならないほど立派に見える。

門に正対し、今度はそこから背後を見ると、中心地と思しき小高い丘の上に巨大な館が見えた。それは、あるいは城なのかも知れないが、楼門とは対照的に縦に巨大ではなく、横に巨大？？いや、『広大』というべきなのか。

そして、大通りは門とその館を一直線に繋いでいる。

（さて、問題は、あの衛兵をどうするか、だな）

命司の視線の先には、どちらかと言えば中国風の武具を身に付け、槍を持った頑健な衛兵が二人いる。見とがめられなければ問題はないだろうが、万が一の事も考えておかなければならない。また、門の内側に二人という事は、外側にも二人程度は門番が居そうだ。つまり、四人以上という事もありうる。

他から出られる場所があればいいのだが、ユートの所から逃げ出し、こんな時間まで人目を避けて街を歩きまわってみると、どうも、

この街は城壁に取り囲まれている様子で、街から出るにはどうしてもこの門を抜けなければならないようだ。その上で、件の門番の衛兵達が、どうしたって障害になる。

こういった場面、映画なんかでは『入るのは難しいが、出るのは楽だ』という判断でいいのだろうか。いや、だがそれでも一つ問題がある。

それは、命司の風体。ジーンズと、ジャケットの下のTシャツ。ごく普通の格好のつもりが、どこか時代がかった衣装が多いこの街の住人と比べ、かえって目立ってしまっている。住民の中には西洋風の服を着た連中もいるが、それもまた、精々が十七世紀とかその辺の、半端に時代がかった服装だ。命司のものとは明らかに違う。

「ジャケット脱げば、労働者っぽく見えねぇかな……あと、スコップとかツルハシとかあれば、ソレっぽく見えるかも知れん」

そう呟いて、ジャケットを脱いだ時？？

「上着、持っててあげようか？」

そんな親切な言葉が届いた。

「あ、ありがとう。頼むよ」

ついつられて笑顔で振り返った先。

「って、うわあぁ！」

思わず一声叫び、命司は後退りした。

目の前には、サラがにんまりと微笑って立っていたのだ。

「……ね、お姉さん怒らないからさ、帰ろうよ？」

命司の様子に苦笑しながら、サラは手を差し伸べた。

（やべ、どうすっかな。なんかコイツ、バカ強いし）

初対面の時を思い出す。胸以外、精々が十二歳程度の女の子にしか見えないこの人物。だが、彼女が放った一撃で、命司は一瞬で動きを封じられた。何か武術を知っているのは間違いなさそうだが、それもかなりの達人だろうという事は、格闘が素人の命司にだってよく分かる。

いずれにしろ、すぐに対処は思い浮かばない。だったら、考える

時間は必要だ。
「つか、ユート……だっけ？　アイツはさすがにキレてるだろ？」
笑顔を引きつらせながら命司が訊いてみると、
サラはぷっくりと頬を膨らませた。左手を腰に当て、右手の人差し指を眼前で左右に振る。
「それはキミの自業自得でしょうが。でも、大人しく帰るなら、あたしがマイスターに口添えしてあげるよ。それに、キミがマイスターをどう思ってるかはなんとなく想像できるけど、そんなに悪い人じゃないよ？」
（いい人、でもないんだろ？　どう見ても、守銭奴ってカンジだったし……）
「知るかそんなもん。前の世界でも借金で苦労してんだよ俺は。それなのに、この世界で人生のリセットかけようとしたら、ハナから借金背負ってるって、どんな罰ゲームなんだよ？」
話しながら、命司は気付かれないように距離を取る。もうこうなったら強行突破あるのみだ。門番の間を全速力ですり抜ける。
「マイスターはねぇ、あれでもキミの事心配してるんだよ？　キミ、ここから逃げてどこ行くのさ？　戸籍も無いならまともな仕事には就けないし、場合によっては衛兵に捕まって、牢屋に入れられちゃうんだよ？」
微かに怒った様な貌をして、サラは必死に説得してくる。
だが、今の命司は自由が欲しい。『マトモな仕事』に就けないなら、裏を返せば『マトモじゃない仕事』になら就けるという事だろう。殺人にさえ手を染めないなら、それも悪くはない。少なくとも、誰かの下で借金を返す為だけに働くより、よっぽど人間的なんじゃないかと思う。
「悪いな。アンタの気持ちは嬉しいけどさ……」
命司は声に力を込めた。
「俺は自由が欲しいんだ。だから、見逃してくれ……」
刹那、サラの反応が鈍った。

「……あ、え……でも……」
逡巡が、彼女の中で生まれたように見えた。
（言霊効いた！　ラッキー！）
一か八かの賭けではあったが、命司はサラに背を向けて門へと走った。全速力。疲れてはいるが、それでも全身に鞭打って足を動かす。ゴールは門の向こう側にある、『真の自由』だ。
「って！　ああ～っ？」
背後から、正気に戻ったサラの叫びが聞こえた。
（クソ！　効果切れるの早えぇよ！）
動揺するが、しかしそれで速度を落とすわけにはいかない。
背後から、軽く、しかも速い足音が聞こえてくる。サラの方が足が速い。
そして前方では？？
「待て待て、止まれ！」
そう言って、門の左に立つ衛兵が立ちはだかった。
（右……いや、すり抜けるなら左だ）
「止まらんか！」
右側の衛兵も駆けつけてくる。
そして、目前の衛兵が槍を構えたその時？？
「てぇりゃああぁぁ！」
そんな気合と共に、
「ごはぁっ？」
目の玉が飛び出るほどの鋭い打撃を後頭部に食らい、命司は意に反して数メートルほどスライディングを決め、衛兵の足にタッチダウンした。
「ぐおお……いいいてええぇ～っ！」
両手で後頭部を押さえ、足をばたつかせてしばらく悶絶する。
そんな命司に、ヤリの穂先が突きつけられた。
「これから閉門だというのに、何用か！　珍妙な格好をしおって、怪しいヤツめ……お嬢さん、ご協力感謝しますぞ」

言葉尻で衛兵が視線を向けたのは、案の定サラだ。
「あ、いややや、違います。この子うちの新入りで。最近この街に来たんだけど、白の国にお使い頼んだら、あっという間に飛び出して行っちゃってね～。夕方に閉門する事も知らないイナカモンだから、ほんっと、指導が大変なんですよ～……あはは……」
乾いた笑いをこぼすサラ。
「ほう、それは大変ですな。ところで、一応、身分の判る物を提示願えますかな」
そんな言葉に、命司は思わず身体を固くする。
「ああ、このコの分、まだ申請中で。あたしで良ければ。……はい」
言って、サラは一枚の名刺大の金属板を手渡した。
「……ほう、セイバーですな……護衛士サラ・アフメド。位階は第四階位武術士。マイスターは……なんと、ユート・ユーゼン殿ですか。それでは、この若者はユート殿のお弟子さんですかな？」
「ああ、そんないいものじゃないの。タダの小間使いだから。……じゃ、お騒がせしました」
言って、サラはそそくさと命司の右足首を掴むと、衛兵に背を向けた。
そんな彼女の背に、一礼した衛兵がもう一声をかける。
「届けは、なるべく早く出して下さいね」
「あいあい～！」
愛想笑いを浮かべ、サラは悶絶する命司を引きずって、来た道を戻っていく。
「くっそ！　離せよ歩けるから！」
「ダメー！　逃げるんでしょっ？」
「逃げないから！」
そんなやりとりのあと、命司はようやく足を解放された。
「ったく……」
立ち上がり、身体の汚れを払い落としながら、命司が呟く。
「なによ、その態度。分かってないんでしょうけど、キミ命拾いし

たんだからねっ？」
左手を腰に当て、右手で命司を指し示してサラは憤然としている。
その言葉に、衛兵が構えたヤリの穂先を思い出した。鋭利な先端と、無慈悲な金属の輝き。比較的平和な？？少なくとも生死に関わる様な争乱を経験した事のない命司でも、それが人殺しの道具だという事は理解出来る。
そして、仮に衛兵の脇をすり抜けることができたとしても、背後から刺されていたかもしれないという事も。
だが、それでも命司は譲れない。奴隷になるために、この世界に来た訳ではないのだから。
「……なぁ頼むよ。俺は自由になりたいんだよ」
そんな懇願を投げてみる。これは本気だ。だからこそ、あえて言霊は使わなかった。
「……ね、ちょっとお話ししよっか……来て」
そう言うと、サラは命司の手を取り、どこかへと引っ張っていくのだった。

一章　実の姉貴と世紀の実験　０８

◆　◆　◆

数十分後、二人が着いたのは大通りの中間点。丘の中腹に位置する、噴水の在る円形の広場だった。

丸い池の中央に聳え立つ、巨大な十字の彫刻。その頂点から、水が溢れ出して落ちて行く。

そんな広場の南側にあるベンチに、命司は誘われた。

「……へぇ、悪くないな……」

丘の中腹ながら、南側に視線を送ると、眼下に街並みが広がり、この都市の構造が良く理解できた。

ここは、湖の上に浮かぶ水上の城塞都市。先刻までいた門は、この都市の内と外を隔てる門なのだ。門の外は、そのまま外輪山まで一直線に大きな橋が延びている。見た限りの印象では、橋だけでも十キロメートルくらいの長さがありそうだ。

（……綺麗、だな……）

自然と、命司はそんな感慨を胸中に満たしていた。

夕日に照らされ朱色に映える壁と、斜めに落ちる影のコントラスト。街並みはどこか中国風で、異国情緒と共に懐かしささえも感じさせる。二階建て以上の建物ばかりだが、路地が広いせいか、東京のような狭苦しさは感じない。機能的でいて、しかし人間的な温かさを感じさせる街だと思った。

「メイジ君はさ……」

不意に、ベンチに腰掛けたサラが、夕暮れの景色を見つめながら口を開いた。

「マイスターのとこにいた方が、いいと思うんだ」

夕日の光のせいだろうか。それまで小さな少女にしか見えなかっ

たサラの愛嬌たっぷりの面差しが??その横顔が、急に大人びた色を載せる。
「……何が目的なんだ？　初対面の、それも得体の知れない俺なんか……金にだってなんねーだろうし。奴隷欲しいんなら、もっと丈夫そうなのいるだろ。……まぁ、機械とか家とか、壊したのは悪かったけどさ……でもあれ、不可抗力っつーか、俺だってやりたくてやったワケじゃねーし」
　それを聞いて、あはは、と、眉根を寄せてサラは笑った。
「そうだね～、正直、マイスターが何考えてるかなんて分かんないけど、でも、なんか価値があると思ったみたいだよ？　異境の人間ってだけで珍しいし、価値出たら売るとか言ってたけどね」
「けっ……守銭奴め……」
　吐き捨てるように命司は呟く。
　だが、サラはそんな命司の顔を、真摯な表情で見据えた。
「だからさ、借金なんて気にしなくていいと思うよ？　……それより、住む場所と……ひょっとしたら秘法を学べる場所が、キミに与えられたかも知れないんだよ？　この機会を、もっと大事にするべきだよ」
「秘法？　って、なんだよそれ」
「青、赤、黄色、白、黒、それと、光と闇。この要素で、世界は出来てるの。それを自在に操って、奇跡を起こす技……ってとこかな」
　そんなサラの説明に、命司は思わず苦笑する。確かに身をもって体験した事だ。氷漬けにされたり、眼、耳、口に何かをされて、こうして異境の人間と不自由なく会話をしている。奇跡以外のなにものでもないし、今更それを疑う道理も無い。
「魔法みたいなもんか？　……ったく、えらくファンタジーな世界に来ちまったもんだ」
『魔法』という言葉を聞きとがめて、サラは頬を膨らませた。
「魔じゃないよ、人聞きの悪い。そんな怪しい宗教みたいなものじゃないの、秘法は。ちゃんと理論があって、体系づけられてるれっ

きとした学問なんだから。ってゆーか、あたしはむしろ、メイジ君の特殊な能力の方がよっぽどファンタジーだと思うよ？　なんなのあれ」

急に問われ、命司は一瞬頭をひねった。が、すぐに思い当たる。

「……ああ、言霊か。あんなもん、たいして役に立たないだろ。アンタもすぐに正気に戻ったしな。前の世界じゃ、もっと便利に使えてたんだけどさ……」

だが、サラは不思議そうに命司を見ていた。

「そうかなぁ？　あたしは武術士の訓練で、対秘法訓練も受けたから、精神的な攻撃にも多少は耐えられるんだよね。立ち直りも早いしさ。でも、メイジ君のはバッチリ効いちゃったからなぁ……あ、でも、マイスターには効かないと思うから、変に試さない方がいいよ？　下手に機嫌損ねたら大変だからね？」

「……まだ、ユートの厄介になるとは決めてないぞ」

「頑固だねぇ……じゃあ、こういうのはどう？　一週間くらい泊まってけば？　この世界に慣れてきたら、改めて逃げればいいよ。手伝ってはあげられないけど、うまくやれば見逃してはあげる」

（……信じていいのかな……でもコイツ、サバサバした性格っぽいし、嘘言うヤツだとも思えないんだよなぁ）

これまで、バイト先や学校で、幸か不幸か命司は人を見る目を養ってきた。どこぞのバカ役人よりは、よっぽど人を見る目は確かだと思っている。

「嘘じゃないって保証は？」

最後の確認として問うた命司の言葉に、サラは困ったような微笑みを浮かべた。

「疑り深いなぁ……まぁ、その方が頼もしいけどね。……キミ、ちょっと境遇があたしと似てるからさ。嘘だったら煮るなり焼くなり好きにしていいよ。えっちな事もしたい放題って事で！」

グ！　と、頬を染めながら親指を立てて見せるサラ。

命司は思わず唖然としてしまう。

「……いや、それはいいや。俺、ロリな趣味ないし」
刹那、サラの額に青筋が浮いた。
「し、失礼だねキミはっ！　このセクシーダイナマイツな大人の女性を前にして！」
言って、サラはその豊満な胸を両手で押し上げて見せる。
が、命司にはどう見ても、精々『発育のいい小学生』が背伸びをしているようにしか見えない。
「いやいやいや、間違った小学生にしか見えないから、マジで」
「こ、これでも二十三歳なんだからねっ？　もうとっくに結婚だってできるんだからっ！」
悔しいのか、サラの目尻に涙が滲んだ。
ふと気がつくと、周囲には夕暮れ時の恋人たちが増えていて、命司とサラの、そんなやりとりを微笑みながら観察していた。
命司は急に気恥ずかしくなる。
「ああ、ああ、分かったからサラ姐さん。はいはい、セクシーですねー」
「も～っ！　バカにしてぇ～っ！」
ブンブンと、拳を振り回し始めるサラ。「キーッ！」という書き文字を彼女の背景に当てたら、表現的に完璧になりそうな勢いだ。
（いや、これで二十三って、絶対ムリがあるだろ……）
思わず、そんな感慨が命司の脳裏を過ぎった。
「分かったから、帰ろうぜ？　な？」
「ふん！　いいよ今更！　キミの事なんかもー知らないっ！」
すっかり臍を曲げてしまったサラ。だが、苦笑しながらも命司が歩き出すと、むくれっ面で、その後をついてくるのだった。

一章　実の姉貴と世紀の実験　０９

◆　◆　◆

半ば廃墟と化したユートの家??集合住宅の一戸に戻った時、

「遅いでサラ！　何やっとったんやボケ！」

二人は、ユートのそんな一喝で出迎えられた。

命司にとっては初めて入る居間。一階は三部屋で、キッチン併設の居間と、その奥に個室らしきドアが見える。恐らく、ユートとサラ、それぞれの個室なのだろう。

日はもう沈みかけだが、居間は天井の照明によって明るく照らされている。電灯、という訳でもなさそうだが、広口ビンの様な形状の照明器具の中には、柔らかく発光する石のようなものが一つ入っている。それは、半ばほどが照明器具の中の透明な液体に浸されていた。

「ゴ、ゴメンなさ〜い。って、あっちゃ〜……」

引きつった笑みを浮かべたかと思うと、サラはそう言って、右掌で顔面を覆った。

湯呑み茶碗の様な食器を片手に、新聞らしき書面を見ているユート。その足元に、二人ほど氷漬けにされて転がされている何者かが居る。顔つきを見れば、どう考えてもカタギじゃないのは明白だ。詳しい事情は分からないが、強盗か何かの類なのだろう。

「さあ、さっさと衛兵呼んでこいや」

そうサラに命令すると、ユートは転がっている男の一人??その頭を踏みつけた。

「マ、マイスター、怪我はない？」

それは、心配からきたものか、それとも怒られたからなのか、半ば狼狽えているようにユートを観察しながら、サラが訊ねた。

だが、ユートは何事もなかったかのように、不敵な笑みを浮かべて見せる。
「俺がこんなヤツらに遅れを取るかアホゥ。ったく、このクズ共、俺の属性宝珠が欲しいんやったらな、黄色属性の秘法師連れてこいや。それも、メッチャ腕の立つヤツ」
冷徹に言い放つと、ユートは命司を見据えた。思わず、命司は担任に悪事がバレた学生のような気分になる。
そんな命司の脇をすり抜け、サラは再びどこかへ出かけて行った。恐らくは、衛兵を呼ぶためだろう。
「さて、メイジ君よ。手間かけさせよって。言いたい事は山ほどあんねんけどな……取り敢えず、これに着替えてこいや」
言って、ユートは命司に服を投げてよこした。
「着方なんて、知らねーぞ？」
「アホか。広げたら服の構造解るやろ。あとは頭使え」
（まぁ、いいんだけどよ……）
「二階借りるぜ」
そう告げて、命司は木製の急な階段を登った。
登った先、二階には照明は無く、代わりに天井の穴から、落ちたばかりの夕日の残光が射し込んでいる。
「……綺麗な、街だよな……」
思わず、命司は呟いていた。
灯りのともり始めた家々の窓。天井から続く壁の穴から、そんな風景が見える。上を見上げれば、残光の中に星が瞬き始めている。あの都会の摩天楼と、その狭間から微かに見えるだけの霞んだ空と比べると、そこには格別な美しさがあった。
「……ま……いっか。めんどくせぇ」
渡された衣服一式を眼前に広げ、命司はそれを着る決意をした。
どうにも、サラに恩義を感じてしまっている自分がいる。ユートに関しても、気にくわない点は色々とあるが、確かに今逃げ出さなくとも、この世界の仕組みやシキタリ、掟や法律、そんなものを知

ってからでも遅くはない。
それに、
「秘法……ね」
サラから聞いた話が、実は命司にとって非常に興味深かった。言い方が違うだけで、平たく言えばそれは魔法だ。そんなものが使えるようになるのだというのなら、確かにここにいる価値はある。専門学校で経理を習うより??いや、例え有名大学を出て、官僚や政治家になれたとしても、その後で欲にまみれ、殺伐とした人生を歩むより、よほど刺激的、かつ充実した人生が送れるのではないのか。
そう思ったのだ。
栄達というものに興味がある訳ではないが、せっかくこの世に生まれたのなら、命司とて『面白い人生だった』と言って死んでいけるような人生を歩んでみたい。

一章　実の姉貴と世紀の実験　１０

◆　◆　◆

小一時間後。

サラが衛兵を引き連れて戻り、衛兵が侵入者を連行して行った後で、テーブルを囲むようにして、三人は椅子に腰掛けていた。

「……ハァ？　お前、ナニゆーとんの？」

命司が秘法を学びたいと言うと、ユートは唖然とした顔を向けてそう言った。

「いや、そしたらさ、俺も、少しはアンタの役に立てるじゃん？」

努めて真面目に切り出したつもりだったのだが、まぁ、説得するのは一筋縄ではいかないことくらい、命司とて予想済みだ。だからこそ、命司は重ねてそう言ってみた。

が、ユートは氷の様に冷め切った視線を、命司ではなくサラに向ける。

「……お前か、焚きつけたんは。コイツ秘法師んなるゆうことが、どないに大変なんか分かってへんみたいやで？　属性宝珠とかどないすんねん？　秘専の学費は？　学院が認めへんで秘法師やっとると、ゴッツ違法なんはお前も分かってるやんな？　借金だらけの俺がやな、お前の武専の時みたいに、ホイホイ金出せる思うなや？」

「わ、分かってるってばマイスター。で、でもほら、前にも依頼の報酬が属性宝珠だったりした事もあったでしょ？」

引きつった笑みを浮かべるサラをよそに、ユートは扇ぐように手を振ってみせた。

「アカンアカン、お前、秘法師が属性宝珠取り込むとき、どんだけ危険なんか分かってへんやろ？　体質に合わへんかったら、最低でも三日三晩寝込むんやで？　そないな危険な事させられっかいな。……大切な売りもんやのに。なぁ？」

最後の「なぁ？」の部分で、ユートが命司に視線を送ってくる。
（いや、知らねーし。つか……）
「属性宝珠って、なんなんだ？」
堪えきれず、命司はそんな問いを口にした。今日この世界に来たばかりの人間を前にして、目の前の二人は遠慮なく専門用語を口にしてくれる。
「五大属性の説明は聞いたか？」
返ってきたユートの問に、命司は頷いた。あの広場で、サラから聞いた話の事だ。
「平たく言うとやな、俺ら秘法師は、世界に満ちた根源的な力を五つに分類したワケや。で、その根源的な力を人に利用できる形に変換する触媒が、属性宝珠っちゅー代物やねん。俺は黒の秘法師やから、水を司る属性宝珠を取り込んどる」
（黒、ね。腹黒そうなコイツにピッタリだぜ）
そう思い、内心でほくそえんだ時、不意にユートの手元からペンが飛翔して？？
「うがっ！」
？？メイジの額に突き刺さった。
「ナニしやがる！」
あまりの激痛に涙目になりながら立ち上がる。
と、ユートは片掌を突き出して、命司を制した。
「いや、まぁ落ち着けや。お前の中から、実に失礼な波動を感じたもんやからなぁ。……で、話の続きやけど、その属性宝珠っちゅーんが、これまた高価なシロモノでな？　まぁ、一番やっすいもんでも、売れば一家族が一生遊んで暮らせるだけの価値があんねん。ちゅーても、遊び方にもよるやろけどな。せやから、依頼で報酬が属性宝珠やっても、お前にゃやれへん。ま、残念やけど、諦めぇや」
「……マジか……おお～い、誰だよ、気ぃ持たせるようなこと言いやがったヤツは」
落胆し、命司はサラに恨みがましい視線を向ける。

「い、いや、でもほら、この先なんてワカンナイじゃない？　なんだったら、あたしが武術教えてあげよっか？」
愛想笑(あいそわら)いを浮かべるサラに、じっとりとした視線を送りながら、命司は口を開く。
「いらね～よ……俺、ケンカとか向いてねーし。そもそも平和主義者なんですよ？　俺は」
命司の言い様に、ユートは苦笑(くしょう)を見せた。
「そないなツラやな。まぁ、しばらくサラに預けるさかい、出来ることだけやっとれや」
「りょ～かい」
言って、命司はテーブルに突っ伏した。
（くっそ、結局下働きの奴隷(どれい)かよ。絶対逃げ出してやる）
「あ、じゃ、じゃあ、ゴハンの支度(したく)するねっ！　命司も手伝ってよ」
どこか間を取り繕(つくろ)うかのように、サラがそう言うと、
「……ヘイヘイ、了解(りょうかい)でござんすよ、サラ姐(ねえ)さん」
命司はスジ目のままで立ち上がった。

二章　王侯貴族と転移秘法　01

？？やっと、あの方がこの世界に来て下さった？？

？？それでは、早く我が家宝を見つけておかないと？？

？？あの者達も、巧く事を運んでくれると良いのだけれど？？

◆　◆　◆

夕方から降り始めた雨は、日が落ちると共に強まり、雷雨へと発達した。

本来ならまだ残照がある筈の時刻でも、既に外は真の闇を形成している。

世界最大の研究教育機関である国際共立大学。その構内には、職員や学生が寝泊まりする為に、幾つかの寄宿舎が配置されている。漆黒の瓦屋根に丹塗りの土壁、一階の廊下と部屋には花崗岩の床。造りは素朴だが、しかしその構造は機能的で、何より建築に際し多数の秘法師を動員したため、最高級の堅牢さを誇っている建物だ。

そんな寄宿舎の玄関にて、黒の国の王族付き女官エシュマは、主の帰りを待っていた。今日は主が学んでいる武専の授業が長引いているらしい。エシュマもまた武専の生徒ではあったが、学級が違う為にこうして宿舎に先に帰って、主の帰りを待っている。

と？？

雷鳴とどろく豪雨の中から、鎧で完全武装した主が玄関に飛び込んできた。

「うわ～！　ひどい雨だねこれは！」

エシュマの主は、顔立ちにまだあどけなさを残す若い騎士見習いだ。王位継承権の順位が低いため、王族の中でも比較的気楽な地位

を得ている。権威ある武専とはいえ、祖国から離れて暮らしているのもそういった理由が大きい。
「エラル様、お帰りなさいませ。お風邪を召しては大変です。早々にご入浴ください」
エシュマはタオルを手渡しながら、微笑んだ。
エシュマの主??エラルもまた同じように微笑む。二人共に、笑顔がよく似ている。だが、似てはいるものの血の繋がりは無い。
背中で三つ編みにした白銀の長髪。額から生えた、黒の国の民の証である一対の小さな角。面差しは秀麗で、肌の色は北国の雪のようだ。そんな似通った容姿が、しかしエシュマに重要な役目を課してもいる。
その役目とは、つまり影武者だ。遠く本国から離れ、世界一安全だと言われている法治国家『ダ＝イン』で暮らしているとは言え、いつなんどき何があるかは分からない。だからこそのエシュマの存在なのだ。
「ありがとう、そうさせてもらうよ。……あ、そうだエシュマ。これ、直せるかな?」
そう言うと、エラルは首にかけていたペンダントを胸甲の中から取り出した。黒い組紐に通された、大粒の黒曜石。その表面には、両刃の戦斧の意匠が彫刻されている。それは、エラルの母の形見の品だ。
「どうかなさいましたか?」
エシュマが訊くと、エラルはペンダントを首から外した。そして、それをエシュマに手渡すと、そのまま自室に向かう。
エシュマもまた、手渡されたそれを観察してみると、エラルが言いたい事にはすぐに気付いた。
「あら、切れかかってますね。今日の授業でですか?」
ヒモは丈夫な筈ではあるが、長年の使用と武専での過酷な授業で、そろそろ取替時の様子である。
「痛い一撃貰っちゃったからね。とどめになっちゃったかも。直る

かな？」
　自室の扉の前に着くと、エラルは鍵を開けながら訊(き)いた。
　エシュマは頷(うなず)いた。
「確か、エラル様のお荷物として、数本の予備を同梱(どうこん)してあった筈です。あとは私がお引き受けいたします故(ゆえ)、どうぞ、ごゆっくりお身体を温めていらして下さい」
「そうさせてもらうよ。じゃ、エシュマ、また後で」
　エラルは自室に入って着替え一式の入った袋を手に持つと、エシュマと入れ替わるようにして、大浴場へと向かった。大浴場は、四つある寄宿舎の中心に位置し、それぞれの寄宿舎と二階の渡り廊下(ろうか)で繋がっているのだ。
「さて、紐はどこに入れていたかしら……何せ、エラル様の大切な品。お帰りになる前に、仕上げなければ」
　勝手知ったる主の部屋。エシュマは日々エラルの身の回りの世話をしている。その為、エラルの部屋は、本人以上に熟知していた。
　カーテンを閉め、照明を点(つ)けると、椅子と机とベッドしか無い簡素な部屋の中で、エシュマは紐を探し始めた。

二章　王侯貴族と転移秘法　０２

◆　◆　◆

雷雨の中で、時折、雷光に照らし出される三つの影があった。
大学構内の寄宿舎。その中で、建物の周囲を生垣によって囲まれているものが二つある。大浴場を囲んで、東西南北に配された寄宿舎のうち、生垣があるのは西と南の建物だ。その西の寄宿舎の西側で、三つの影は蠢いている。
三つのうちの二つの影は木製のスコップを使って、生垣の両側から、生垣の一部??その一本の木の根元を掘り起こしている。
「ったくよ、木は青属性だから、白属性の金属に弱いんだろ？　こんなもん、切り倒しちまえばいいじゃねぇか」
掘っても掘っても根の先が見えずに、影??ロープを纏った男の一人は不平を漏らした。
「金属の道具使うとマズいんだってよ。根っこもキズ付けんなって指示だし」
「いいから急げ。この雨だ、ある程度掘ったら三人で引っこ抜くぞ」
根元を掘る屈強な男達にそう言って、傍にいる小柄な男は掘り返された穴を覗き込む。が、穴にはすぐに水が溜まり、状況は分からない。
しかしそれでも??
「よし、ここらで一度引っ張ってみよう」
小柄な男の提案で、根元を掘った生垣の木を三人で掴んだ。
「いくぞ！　せぇ～の！　引け！」
声にならない気合を発し、三人は引いた。
だがそれでも、容易には動かない。
ゆすってみる。一頻りそうしてから、再度引く。

微かな手応えを感じた。やがて??
ずり、と、大きく動いたのを手始めに、その木は抜け始めた。だが、
「お、おい、どこまで長いんだよ、この木はよっ?」
枝を離して幹を掴み、幹を離して根を掴み、その根がどこまでも続く。
「じゃあ、俺が木を向こうに引っ張って行くから、お前らは根を引いていってくれ」
小柄な男はそう言い置き、抜いた木を引っ張って歩いて行く。そして、二人の仲間から合図があった時、小柄な男はおよそ三丈三尺（約十メートル）以上も離れた場所に到達していた。
小柄な男が駆け戻ると、三人は互いに目配せをして頷き合った。そして、そのまま姿勢を低くし、生垣の内側に入った。
寄宿舎西側の壁には窓がない。が、男達はそこから南に回り込み、移動して行く。
とある部屋の前で先頭の小柄な男が合図をしながら止まると、出窓の下から背伸びをして、窓を覗いた。しかし、カーテンに仕切られている室内を窺い知る事が出来ない。
小柄な男は思案した。跳ね上げ式のガラス窓。その奥のカーテンを動かさなければ中の様子が窺えない。これまで培ってきた技術を駆使すれば窓を開けるのは容易いが、しかし、その前に一度頭目の指示を仰ぐべきだと思った。
小柄な男は右耳に右手を当て、口元に左手を当てた。それが秘法の発動条件となる。
「あ、カシラですか？　手筈は順調なんですが、部屋の中が見られやせん。灯りは点いてるんで、誰か居そうな気配なんですがね？
……ああ、分かりやした。お気を付けて」
小柄な男は通話を終了すると、仲間達に小声で指示を出す。
「このまま待機だ。首尾良く運べば出番はねぇがな」
「うへぇ、早く戻って酒が呑みてぇ」

「全くだぜ」
口々に呟(つぶや)きながら、男達三人はその場で肩を寄せ合い、まるで出窓の部屋の備品ででもあるかの様に固まった。

二章　王侯貴族と転移秘法　０３

◆◆◆

探し出した予備の組紐。数本あるうちの一本??空色のそれ??に取り替えて、ペンダントの補修は完了した。

「さて、これで完了。……エラル様、この色を気に入って下さると良いのだけれど……」

椅子に腰掛けたまま、主の喜ぶ顔を想像しながらエシュマはペンダントを見つめた。エラルの母の家系に伝わる秘宝。どれほど強い衝撃を与えても傷一つ付かないという噂の黒曜石。ある者はこれを古代ダ＝イン王朝の秘宝を手に入れる為の鍵だと言い、ある者は古代ダ＝イン王朝が残した一千万の軍勢を召喚する呪物だと言う。

結局のところ真相は良く分からないが、ただ一つ確かな事は、これがエラルの母の形見だという事だ。だからこそこのペンダントは、エシュマにとっても大切な品だった。まるで、実の娘の様に可愛がってくれた、エラルの母の品なのだから。

「お母上様……エラル様は、私がお護り致します。ご安心ください」

エシュマはペンダントの黒曜石を両手に捧げ持ち、瞑目した。孤児として人買いに買われ、西の白の国に売られる所を買い取り、引き取って育ててくれた黒の国の第五王妃。その日から、エラルの遊び相手として、また世話係として、そして何より密やかに姉のような心持ちで、エシュマはエラルを見守ってきた。第五王妃亡き今となっても、王妃への感謝と忠節を忘れたことなどない。今もこうして目を瞑ると、王妃の笑顔がまぶたに浮かぶ。

だが、

不意に、エシュマは王妃の笑顔と共に、喉元にひんやりとした殺気を感じた。

同時に、ドアの内鍵がかけられる音が響く。
「……何者です？」
両目を見開くと、身じろぎ一つせずにエシュマは問うた。
「へぇ、冷静だ。騒ごうもんなら、少し刃を引いて声を出せなくしてやろうと思ってたのに。さすがは黒の国の王族」
どこかかんに障る、高い声質と口調。
（エラル様、どうかごゆっくりご入浴を……今戻ってはいけませんよ）
エシュマは覚悟を決めた。賊の目的は今一つ分からないが、どうやらエラルの部屋と知っていて侵入してきた様子だ。ならば、この『部屋の主として話をする』までの事。
「そなた達、私をエル＝ア＝リエリ・メル・ハシュパカルと知っての狼藉か？」
「その通りだ。御足労だが、依頼人がそのペンダントと、アンタに用が有るそうなんでな。まぁ、大人しく一緒に来てくれ。大人しくしてりゃ、悪いようにはしねぇよ」
その声に、エシュマは思わず内心で身震いした。理知的な響きを持つその男の声は、いま喉元に刃を押し当てている男のものではない。この部屋に、自分以外に『二人』居る。その事実に、その声を聞くまで気付かなかった？？いや、気づかせなかった事に、恐れを抱いたのだ。
「……用が済めば私と、このペンダントはここに帰してくれるのか？」
「さぁね？　依頼人次第だろ。嫌だと言っても連れてく事にはなるがな……立たせろ」
指示を受け、背後の男は首筋に刃を当てたままで、エシュマの左脇から手を通した。
「くっ……この痴れ者め……！」
刹那、エシュマは貌（かお）を一強ばらせた。嫌悪で全身の肌が粟立つ。男の手が、明らかにわざとエシュマの右乳房を鷲掴みにし

たからだ。
「おっと、これは済まねぇな」
下卑(げび)た忍び笑いを耳元で漏(も)らし、背後の男は味わうように撫(な)でてから手を離す。
「よせ、遊んでる時間はないぞ」
仲間の戯(たわむ)れを見咎(みとが)めて、理知的な声が響く。
立ち上がったエシュマは、リーダーらしき男の顔を見た。
（こいつまさか……どこかの没落(ぼつらく)貴族……か？）
エシュマが見たのは、まだ若い??精々、三十代前半くらいに見える男だった。金髪(きんぱつ)のウルフカットと、その精悍(せいかん)な顔立ちが野性味を感じさせるが、しかしそれに反し、鼻に軽くかけているレンズの小さな丸眼鏡が、知性と、そしてどこか高貴さをも滲(にじ)ませていた。それに加えて、ただのならず者では無いような、理知的な声の響き。
男は手に持った紙製の符を花崗岩(かこうがん)の床に落とす。
「これは??」
エシュマは目を見張った。
符が床に落ちたその瞬間、そこには三人を囲むように円陣(えんじん)が浮かび上がって見えた。そして、目の前の男と自分の身体、それから恐らくは背後の男の身体が、薄らいでいく。
「??まさか、転移秘法陣?」
そんな疑問のみをその場に残し、エシュマと、そして二人の賊(ぞく)は室内から完全に消え去った。

二章　王侯貴族と転移秘法　０４

◆◆◆

雷雨が激しくなる一方だというのに、この国共大には外に出ようとする物好きがいる。それは、一人の老爺だった。

老爺はローブのフードを目深に被り、中庭に出ると、誰かを警戒するように周囲を見回して、泥と化した中庭の土に右手の人差指を差し込んだ。

「さて、最高責任者たるもの、率先して見回りをせねばの。……しかしシリンに気づかれずに、シャワールームを覗く事はできんもんか……こんな時は、黒の属性秘法を覚えておけば良かったと思ってしまうのう……」

溜息と共に、老爺はそう言った。秘法師は皆、その属性に対応した感知スキルを体得している。今夜の雷雨で、黒属性??水の属性の秘法師の感知範囲は大幅に広がっている筈なのだ。

ところが、老爺が修めた属性秘法は黄色??つまり土の属性なのである。この雷雨を活かす事はできない。そして、それ故の悩みが老爺にはある。

老爺の悩みは、見回り??を口実とした覗き??が、年々やりづらくなっていっているという事だ。年老いた我が身。これに活力を入れるのは、若い娘の『芸術的な美しさ』だけだと老爺は考えている。そんな『高尚な嗜好』を変態呼ばわりされるのは心外だが、『芸術活動』を侵害されるのはもっと心外である。

老爺は、そのまま意識を集中する。腕を伝い、指を伝い、意識が大地という名の海に潜る。

「さ〜て、それでは一応念のため、寄宿舎から見回ってみるとするかのう」

老爺の意識は土中を進む。まるで水中を進むかのように、視覚が移動して行く。真上を見上げれば地上とその上の雷雨の模様も見えるし、視線を斜めにすれば、雨粒の向こうに構内の建物も見える。

土中に視線を戻せば、建物や周辺の植物が、まるで水に浮かんでいるかのように見えている。そして、目指す寄宿舎の周囲には、深くまで張った植物の根が見え、その根に囲まれた空間だけが、立体的な範囲で視認できなくなっている。それは、木を司る青の属性秘法『緑化結界』と呼ばれる代物だ。

「むうぅ……どこか一箇所でも、緑化結界の一部が落雷で燃えてくれんものかのう……」

植物の根??それが形成するのは、黄色属性の感知や秘法による侵入を防ぐ結界だ。老爺ほどの秘法師であれば、黄色属性が苦手とする青属性の結界でも、どうにかできる術はある。が、それをすると、天敵であるシリンが来てしまう。結局、こうして自然災害でも待つより他に仕方が無いのだ。

だが??

「おや？　なんじゃあれは？」

??この晩ばかりは少々事情が違っていた。視線の先で、どう見ても引き抜かれたとしか思えない結界樹が、緑化結界から離れた位置に倒れている。そして、その根の方向に結界の綻びは在った。

「……シリンの罠ではなかろうな？」

思わず、そんな疑念が過ぎる。だが、老爺は千載一遇のこの好機を逃がすつもりも無い。

「いや、例え罠だとしてもじゃ！　ワシは芸術と共に死ぬるぞ！待っておれ女体！」

鼻息も荒く気合を入れると、老爺は結界の綻びに突進した。が、その刹那、老爺とすれ違うように、何かの秘法効果が勢い良く飛び出していった。それはあくまで擬似的な視覚だが、老爺の感覚は、『それ』がこの都の直下、奥深い場所へと高速で去っていったのを確かに見た。

「……感知範囲外に去ったか……何者じゃ……？」
黄色属性の感知スキルには、感知範囲に限界がある。その広さは水平方向には比較的に広いが、垂直方向にはなかなか延ばすことはできない。そして、この首都の地下には、古に滅び去った古代文明の都が眠っていると言われている。だが、黄色の属性秘法の第一人者であるこの老爺でさえも、そこに辿り着いた事はないのだ。
「さて、どうしたものかの……」
老爺は思案に暮れた。これは、あるいはシリンと相談すべき事なのではないか。更に重大な事であれば、大学の職員会議、果てはこの国の国会で議題に上げなくてはいけない事柄に発展する可能性もある。そう思ったのだ。
それは、寄宿舎より飛び去っていった秘法が、『転移秘法』と呼ばれる高等秘法であった事と、何より、その行き先が実在も分からない口伝にのみ存在する地？？すなわち、この首都ダ＝インの地下深くであるとい事だ。何かが胎動しつつある。そんな予感が老爺の胸中を満たし始める。
そんな時だった。
「……まずい、このままでは殺されてしまう」
老爺の本体が、何らかの攻撃を受けたらしい。こうして意識を身体から切り離しているお陰で痛みこそ感じないが、身体からは生命の危機が伝わってきているのだ。攻撃を加えた相手の正体は、おおよそ予想がついている。だが、『まだ』何もしていない老爺にとって、その攻撃は濡れ衣以外の何ものでもない。
「早く戻らねばならんか……シリンめ、早とちりしおって……戻ったら、そのまま気絶してしまうんじゃろうなぁ……」
老爺の意識は、急いで『気絶する程のダメージが蓄積しているであろう』本体に戻る事となってしまった。

二章　王侯貴族と転移秘法　０５

◆◆◆

雷雨が収まったのは、真夜中の事だった。

「うぉ～……やっと……星が見えた……」

天井と壁に穴の開いた二階の部屋で、星空を見上げながら命司は呟いた。まだ薄雲のかかる星空。今この世界の季節は春という話ではあるが、外気温と変わらない室内は寒いとすら感じる。

「……春雷っつっても、風情ねぇよなぁ……」

雷が苦手、という事もないのだが、さすがに低温と雷鳴の中で眠れるほど図太くもない。

「……せめて屋根がなぁ……まぁ、自業自得なんだけどさ……」

自業自得、とはいうものの、多分に不可抗力の色彩が強い。それでいてなお、まるで戒めのようにこの部屋を宛てがわれている。

（あの野郎、なんだかんだ言いながら、絶対罰ゲームだろコレ）

ユートの貌を思い出しながら室内を見渡すと、天井と壁の穴から降り注いだ雨が床を帯状に濡らしているのが良く分かる。そして命司が寝泊まりしている寝台は、辛うじてその帯から外れていた。

雲間から月光が差し込み、命司は寝台に戻った。

「借金……かぁ……そりゃ経済活動がありゃ、金って概念があっても不思議じゃないけどな……」

横になり、天井を見上げながら命司は呟いた。明日で丁度一週間。それだけの日数を暮らして、ユートやサラから聞いた事も多くある。その上で命司が思うのは、この世界が、元居た世界に似ているという事だ。もちろん、相違点は沢山ある。獣人っぽい人間もいれば、妖精みたいな耳の長いヤツもいる。だが、感情や考え方に大きく違うところはない。異境の人間とは言え、やはり『人間』なのだ。

そして、文化。命司の普段着（ふだんぎ）となった狩衣（かりぎぬ）に似た衣装を手始めに、サラの服や他の国の民族衣装も、どれもこれもがどこかで見たことがあるようなものばかりだ。

それから、名前。日本的なものばかりではないが、耳に入る半数くらいが、どこかで聞き覚えのある発音なのだ。

（結局のところ、『人間』がいれば、行き着くものは一緒なのかもな……）

そんな事を考えながらも、ふと、命司は姉の顔と共に、別な発想が思い浮かんだ。

「……ま、あくまで可能性、だけどな……ああ、嫌なツラ思い出しちまった……寝よ」

明日は朝からここの工事だ。それに備え、命司は目を閉じた。

二章　王侯貴族と転移秘法　０６

◆　◆　◆

まだ夜も明けきらぬ時間。
国共大の正門脇に在る衛兵の屯所で、二人の騎士が話をしていた。双方ともに、額に黒の国の民の特徴である角を生やしている。だが若い騎士と比べて、巨漢の騎士の角は太く大きく、そして螺旋に巻いているのだった。
若い騎士はエラル。それから巨漢の騎士はエラルの護衛だ。
「ボクは……ねぇラグル、ボクはどうしたらいいの？　ペンダントを護る為に、ボクは世界一安全なハズのこの国共大に来た。なのに、エシュマとペンダントが……消えるなんて……」
エラルは涙を滲ませて、唇を噛みしめた。
「エシュマの事は、判断がつきかねます。或いはすでに……」
「言うな！」
巨漢の騎士・ラグルの言葉に、エラルは声を高くした。
「エシュマに限って……そんな事、無い……」
「……そうですな。……ですが、エシュマがエラル様の身代わりとなったとするなら……その努力を無にする事は……」
「分かってる！　分かってるよ……もう、エシュマの名前は……出さないよ……」
エラルの脳裏に蘇る、珠玉の思い出たち。物心ついた時から、いつも傍にいてくれた存在。それがエシュマだった。主従関係なのは解っている。でも、それでも、姉として慕っていた。口うるさいところも、厳しいところも、全て全て、エシュマの優しさだった事。それをエラルは知っている。
だから、何者かがエラルを連れ去ったというのであれば？？自ら

の身代わりになったという可能性がある限り、エラルはエシュマの名を出さない。彼女の、苦労に報(むく)いる為に。

「時間になりましたら、セイバーを雇いましょう。とりわけ優秀なセイバーを。それがしにも、心当たりがあります故(ゆえ)」

ラグルはエラルの肩に手を置き、慰(なぐさ)めるようにそう言った。

「……そう……だね」

作った笑顔を、エラルは巨漢の騎士に向けた。

二章　王侯貴族と転移秘法　07

◆◆◆

晴れた空と、吹き抜ける爽快な風。

大陸中央の高地に位置する法治国家ダ＝イン。その国名と同名の都『ダ＝イン』は、昨夜と打って変わって穏やかな天候に恵まれていた。

東西南北、四方の強国に囲まれ、それでも平穏を保つ世界一の都。その都市機能と美しさは、正に世界一の名に相応しい。

そんなダ＝インの一角、閑静な住宅街で、早朝から工事の音が響きわたる。

「あ～、やっと、屋根と壁が直るのねぇ……」

事務所兼住宅の二階の部屋。職人たちが作業をする傍らで、サラが感涙と共に呟く。昨日、ようやく全ての瓦礫と機材の残骸を処分して、今日になって職人を呼んだという次第である。

「わ、悪かったよ……」

苦笑を浮かべながら、命司もまたそう言った。

命司がこの家兼事務所に身を置いて、早くも今日で一週間。その間、命司は炊事洗濯から事務仕事まで、一通りの作業をサラから学んでいた。とはいえ、学ぶというより、ここのやり方を教えて貰っただけで、あとはこなしていける仕事ばかりだが。

「でも、ま、この天井と壁が壊れたのを引換にメイジ君が来てくれた、って考えれば、安い買い物だったかもね～」

にひひ、と笑って、サラは命司を見上げてくる。

そして、そんな何気ない言葉が、どうしてか命司には嬉しかった。どれだけ懸命に働いても、今まで言われた事のない言葉だったから、かもしれない。

そう思うと、嬉しい半面、気恥ずかしくもあった。
一週間暮らしてみて思った事だが、この世界は、人々が実にのんびりしている。この世界での労働時間は、平均四時間程度。八時から昼まで働けば、一日の仕事が終りとなる。
更に言えば、このユートのセイバー事務所に至っては、客が来なければする事など殆どない。ちなみにセイバーとは、いわゆる何でも屋だ。探偵業に近いが、顧客の依頼によっては特殊な品を扱うバイヤーの様な仕事もある。報酬はなかなかに高額な様子で、しかしそれだけに時間を持て余す事も多い。
だがそれでも、サラはこうして助かっていると言ってくれる。嘘や冗談ではなく、本気で言っている事は伝わってくるが、反面、命司は『こんなんでいいのか？』という気後れもあった。持て余す時間が、どうにも勿体無く感じてしまうのだ。それは多分、人生の大半がタイムカードで価値を決められていたからだろうと思う。
「ま、まぁ、これ以外にも、ヘンな機材ぶっ壊したけどな……」
「あ～、それも入れたらトントンかな～」
気恥ずかしさを誤魔化すため、苦笑しながら言った命司の言葉に、サラもまた苦笑を返してくる。その『トントン』というあたりを、高い評価なのか低い評価なのか、どう判断していいのかは微妙なところだ。
その間も、職人たちは次々と壁や天井を直して行く。ひどい壊れ方をしているようにも思えたのだが、彼らの作業を見ているうちに、命司は意外とそうでもないのか、とも思い始めていた。が、その傍らで、ふと思い至った事がある。
「なぁ、サラ姐さん。これって、秘法で直せないのか？」
ふとそんな疑問を呟くと、
「あ～、それはね……」
「それはな、兄ちゃん！　ハッキリ言って可能なんだけどよ！」
不意に、頭の左右に巻角を生やした銀髪で中年の職人が、サラの言葉を遮るように口を挟んだ。

「可能なんだけど？　何か問題あるんスか？」
「おう！　家の材質は主に木と土。つまり、青と黄色の秘法師がいりゃ、きれーに直せるってもんさ。けどな？　青はまぁ、それなりにいるんだが、いつの世代でも、黄色の秘法師がいねぇのよ」
「ほお……」
職人の言葉に、命司は興味を誘われる。そこにサラが付け足した。
「黄色の秘法師、人気ないからね～。あたしの世代ん時も、秘専で黄色属性専攻してるコ、一人くらいしかいなかったなぁ」
「へぇ……なんで？」
半分も理解出来ていないが、命司はとにかく話を促した。
「そりゃおめぇ、地味だからだろ？　水を司る黒は万能だし、火を司る赤は、戦いに臨んで無類の強さだ。金を司る白は職人に喜ばれるし、木？？まぁ、つまり広義に生命の事だな？？を司る青は、労働者に喜ばれる。ところがだ、土を司る黄色ってなぁ、なんかこう、今一つパッとしねぇんだな？」
話しながらも職人は手を休めない。その事に感心しつつも、命司は話の続きが気になった。
そこで、またサラが補足を加えてくる。
「ん～、まぁ、凄い術使えるって言えば、そうなんだけどね～……戦いで使えるのは、土壁を生成して障壁にするくらいだし……まぁ、何百年か前の達人は、金属を生み出す性質を利用して、床から武器出したとか聞くけど。あとは……あ、そうだ、あれ！」
何かを思い出したかのように、サラは部屋の片隅に駆けて行く。そして、一枚の金属鏡を持ってきた。
「これこれ。黄色属性と白の国の工業力が造り出した便利アイテム」
「ほお？」
命司は、サラが持ってきたそれを覗き込んだ。だが、特に何かが見える訳でもない。
が、それに構わずサラはそれを床を這うワイヤーのようなものと繋いだ。

刹那、
「……おお！」
命司は思わず感嘆の声を漏らした。
金属鏡の鏡面に、文字が浮かび上がったのだ。
（って、なんかパソコンみてぇ）
何か、製造元のロゴらしきものが浮かび上がり、それが消えると各種機能の案内の表示が出てきた。
「あ～、俺の国にもこんなのあったよ」
ネット喫茶を思い出し、ついそんな事を言う命司。
同時にサラの顔が引きつり、必死に「余計なこと言っちゃダメでしょ！」とアイコンタクトを送ってくる。
が、
「あ～、兄ちゃん、白の国の人だろ？　だったら知らない方がおかしいわな。わはははは！」
『わは！　ははは！』
豪快に笑う職人につられ、命司とサラは、顔を引きつらせたままで一緒に笑った。
「あ、まぁ、この『機種』の使い方はさ、このテの機械を持ってる人と、遠隔地だろうと会話する事だよね。……メイジ君には、今更ミミタコだろうけど、ね～……」
微妙に視線をずらしながら、きわどい説明の仕方をするサラ。
「……と、とまぁ、こんな機械なくても、黄色の秘法師は、地面を通じて遠くの事を知る事ができるんだってさ。意外とね～、地味だけど、セイバーには向いてると思うんだよね～。あと、おじさんが言ったみたいに、土木工事で活躍できるしね」
「……ホンっと、地味なんだなオイ」
思わず、過ぎった感慨を口にする、と、
「でもまぁ、それだけに貴重だわな。それに、古代ダ＝イン王朝の秘宝とやらと、黄色の属性が密接な関係あるらしいしな！」
職人は、そう言って愉快げに笑った。

「お、面白そうだね、それ！」
つい、命司もつられて笑顔を見せる。が、サラだけは違っていた。
「え～？　そんな胡散臭い話はいいよぉ。タダのおとぎ話でしょ？」
心底冷え切った眼差しを向けて、サラは興味がない事をアピールする。
『……女は現実的だからな～』
興を削がれ、思わず命司の声と職人の声が重なった。
そんな時？？
「サラ！　メイジ！　降りてきなさい！　お客様ですよ！」
階下から、そんな声が耳に届いた。
「……え、ユー……ト？　つか、あれ？　関西弁は？」
呆気にとられる命司の眼前で、サラは苦笑してみせる。
「ああ、メイジ君初めてだっけ？　カンサイベンってのはよく分かんないけど、あれがマイスターの営業トークだから。覚えといてね？　さ、行くよ！」
言って、サラは命司の手を引いて、階下へと向かった。

◆◆◆

一階に降りると、慣れたもので、サラはさっそく客に出す茶の準備を始める。

命司はユートに手招きされ、その隣に座った。事務所と言っても、民家の居間である。食事もここで取っている以上、居間の中心には六人ほどが掛けられるテーブルと椅子があり、ユートと命司は、来客二人と差し向かいになるように陣取っている。

本日の客は、この水上都市ダ＝インに拠点を置く、街道警備騎士団の騎士だった。

二人ともに、同じ軍装をしている。騎士団の標準装備である巨大戦斧と、胸甲のみが西洋風で、小手やスカート、それから臑当などがどこかエイジャンテイストのする防具一式。それらの総重量はかなりのものだと思われるが、しかし二人の騎士は、それを顔に出すことなど無かった。

（ふうん……職人のオッサンと、同族かな）

二人の風体に、命司は上階で作業をしている職人の顔を思い出す。

騎士は、立派なヒゲを蓄えた大柄な中年と、命司とそう歳の違わないような、細身の若者だ。彼らは一様に、銀色の長髪を背中で三つ編みにしている。そして、何より特徴的なのは、額から生えた二本の角だった。中年の方は、職人の親方と同様に貫禄のある巻角となっている。一方で、若者の方はまだ角も小さく、全体の長さは５センチほど、そして、巻角としては『巻き始め』といった趣だ。見た目には秀麗ではあるが、騎士としては優しげな、どことなく頼りない面立ち。それ故に、なんとなく応援したくなる。そんな若者だ。

「ユート・ユーゼン殿、貴殿の御高名は耳に聞こえております。先

日も、押入った属性宝珠目当ての賊を、一瞬で虜になされたとか。
いや、我らが騎士団に欲しいくらいですな」
言って、中年の騎士は豪快に笑った。
「あ、あの、ラグル殿、そろそろ本題に……」
傍らの若い騎士に促され、ラグルと呼ばれた騎士は、額をぴしゃりと叩く。
「おっと、これは失礼。それに、まだ名乗っておりませんでしたな。儂はラグル・エトルカ。そしてこちらは、エラル・メ……」
「ラグル殿！　名乗るくらい自分でできます！」
ラグルの言葉を遮り、若い騎士がどこか恥ずかしげに制した。
（上司……ってワケでもないのか？　なんだか、妙な取り合わせだな）
ふと、二人のやりとりに、そんな感慨が浮かぶ。
「えっと、失礼。ボクは、エラル・ハシュパカル。名前から、黒の国の王族だとお察しされたかと思いますが、王族と言っても傍系です。今は一武術士として武専で学ぶ傍ら、こうして研修を兼ねて騎士見習いをしている身です。どうか固くならずにお願いします」
（へぇ……王族なのに、謙虚なんだな）
エラルの態度に、命司は思わず感心した。事情は良く分からないが、『なんだか良く分からない自信に満ち溢れて周囲を振り回すような連中』に囲まれて生きてきた身としては、エラルの態度は感動モノで、かつ好感が持てた。
「粗茶ですが、どーぞ」
どうしてか日本的なセリフを吐いて、サラが湯飲み茶碗を並べて行く。そしてサラもテーブルに着くのを待って、ユートは切り出した。
「では、エラル殿、ラグル殿、ご用件を承りましょうか」
「それでは……よろしくお願いいたします」
言って、二人の騎士は深々と頭を下げた。
「あれは、昨日の事です。ボクが武専での授業を終え、大浴場から

戻った時……」
よほど悔しいのか、エラルの目尻に涙が滲んだ。

それは昨日の事。武専??国際共立大学付属武術士専門学院??にて、戦技の授業の後、いつものように大浴場で入浴して、自身の個室に戻ると、確かにそこに置いたハズの、エラルの母の形見が無くなっていた。

慌てて寄宿舎の寮生に尋ねてみるも、誰も知らなければ、不審者を見た覚えもないという。

エラルは悔やんだ。母の形見とは、国の色を象徴するような黒曜石のペンダントだ。本来割れやすい筈の黒曜石。しかし、エラルのそれは特別な品だった。どんな衝撃を受けてもヒビ一つ入る事はない。そして、その大粒の黒曜石の表面には、柄に二匹の蛇が絡みついた、戦斧の紋章が刻印されている。

それは、母の祖先から脈々と受け継がれてきた家宝。譲り受けたその時に、絶対に肌身離さず持っている事、と、死の間際の母より託された物なのだ。

「やれやれ、武専も質が落ちたものだ。……いや、国共大そのものが……ですかな?」

エラルの話を聞き終えたユートは微かな皮肉を込めて苦笑した。

それを見て、エラルは微かに下唇を噛んだ。

命司がふと見れば、そんなエラルの仕草がツボにハマったのか、サラが何かを堪えているように瞳を潤ませて、プルプルと震えている。この一週間ほどで分かった事だが、サラは美形に目がない。ユートに仕えているのも、半分以上はそんな事情からのようだ。

「とにかく……ボクの不注意だとは重々自覚しています。しかしそれだけに、母の形見を一刻たりとも他人の手に委ねていたくはないのです。どうか……ユート殿。貴殿は凄腕のセイバーだと聞き及んでおります。どうか……必ず、見つけ出して頂きたいのです」

必死だ、と、命司は思った。身内の形見の品なぞ持ったこともない命司には、エラルの心境は分からない。が、もしも祖父から譲り受けた言霊が『物』で、それを失くしたなら??そう思うと、エラルの気持ちも少しは理解出来る気がした。

「ふむ……そうですね。お引き受けするのは問題ないのですが……」

呟いて、ユートは懐から懐中時計を取り出した。命司の世界同様に、十二で刻まれた時刻。見方は少々異なるようだが、針は今の時間??午前七時を指している。

それを確認して、ユートは再び口を開いた。

「まだ開門前です。秘法師が関与していないのであれば、少なくとも品物はまだ城内にある筈。ラグル殿、一両日中に??そうですね、少なくとも今日だけでも、都の正門よりの出城を制限する事は可能ですか？　商人や旅行者から損失は出るでしょうが……それを黒の国が補填する事はできますか？」

ラグルは一瞬黙すと、しかし即答に近い形で頷いた。

それを見て、ユートが口元を微かに歪める。

「それでは、報酬はいかほど頂けるのでしょう？」

ユートの言葉に命司は驚いた。相手は国。ふっかければいいものを、とも思うが、そこはそれ、口には出さない。

「そうですな……」

言って、ラグルは小さな巾着をテーブルに置いた。親指二本分くらいの、本当に小さな、絹みたいな光沢を放つ、淡い桜色の巾着。その口を開け、その中身をテーブルの上に落とす。

かつん、と、固く乾いた音がした。

ごくり、と、サラの喉から音が響く。

それは、ラムネの栓にしているようなビー玉大の、黒い??それこそ、黒曜石のような色合いの玉だった。

「属性……宝珠……」

我慢しきれなかったのか、サラが目の色を変えて呟く。

「左様。八十年物です。我が国の第七階位の秘宝師が逝去した後、

その腹より取り出したものです……いかがですかな？」
「はは……参りましたな。私が欲しがっていたものを、良くご存知で。……無論、成功報酬で結構です。それは一度お納め下さい」
どこか、いつになく気圧(けお)されているように見えるユート。彼がそう告げると、ラグルは無言で属性宝珠を仕舞(しま)い込んだ。
「それでは、儂(わし)はこれで失礼いたします。門の件で急がねばなりませぬ故(ゆえ)……では、エラル様は武専にお戻りくだされ」
そう言って、ラグルは一礼すると、そのまま去っていった。
が、エラルは俯(うつむ)いたまま、立ち去ろうとしない。
そんなエラルの様子に、ユートは命司とサラにアイコンタクトをしてきた。
「サラ、メイジ、ちょっと私の部屋へ……エラル殿、しばし失礼致します」

◆◆◆

移動した先、薄暗いユートの部屋で、三人は顔を寄せ、声を落として相談を始めた。
ユートと、そしてサラの顔が、これまでになくにんまりと微笑っている。
「聞いたか？　八十年ものの属性宝珠やで？　小さな街ならまるごと買える価値や！」
嬉々として呟くユートに、しかし命司は落胆していた。万が一にもないとは思っていたものの、報酬の属性宝珠を託してくれないものかと、心のどこかで考えていたのだ。
と、不意にサラが口を開く。
「でもマイスターは、自分の法力を強化するのに使うんでしょ？　確か、今使ってるのは五十年ものだもんね？」
「当然やろ……今使てんのと入れ替えんねん。で、余った属性宝珠は当然……」
その言葉に、命司は思わず自身を指差す。
が、
「……売る。か～なりヤバい儲けやで？」
続いた言葉に、命司は再び肩を落とした。面白くはない。だが、それでも仕事は仕事。この勤勉さをなくせば、命司がここにいる意味もない。
「んじゃ、俺は何したらいいんだ？」
「おうそれや。まぁ、これ持ってけ」
言って、ユートは服の袂から掌大の巾着を出した。そして、その中から金貨を一枚取り出すと、それを命司に握らせる。

「……あ？　え？　お？」
驚き、ある種の狼狽を浮かべる命司に、ユートは小声で言った。
「お前、あのエラルっちゅーボンボン連れてな、市場にでも行って来い」
「……はぁ？」
意図の汲み取れない命司の傍らで、サラが金貨を見つめながら「いいな～」と指をくわえている。
「ああ、二手に分かれて調査か？　でもいいのか？　お客さん働かせて」
ようやく思い至った結論を口にすると、ユートは肩を組んできた。キツネ顔が間近に迫る。
「アホかお前。フリやフリ。あのボンボン、思い詰めた貌しとったやんか？　ぜったい『調査の手伝いさせてくれ』て、言うてくるに決まっとる。せやけど、そんなんで変に引っ掻き回されたらかなんねん。しかも、探し出せいうんは、恐らくは国宝級の代物や。デリケートにいかなあかん。せやから、お前は『いかにも探してますよ～』っちゅうフリをしてやな、今日一日あのボンボン見張っとれ」
「ああ、まぁ、いいけどな。適当に聞き込みしながら、遊んでりゃいいんだろ？」
命司がそう言うと、ユートは満足げに微笑った。
「お前、ホンマ優秀やな。説明要らへんのは助かるわ。ホンマに」
（え……褒め……た？）
これまで無かった事に、命司は驚いた。そしてそれ以上に、どこか気恥ずかしくもある。
「いや……別にフツーだろ。このくらい」
そう言って、視線を外す。と、
「カワイイね～メイジ君。もしかしてキミ、ツンデレ？」
サラのそんな言葉で、顔面が一気に熱くなった。
「うううう、うるせぇ！　ツンデレ言うな！　褒められ慣れてねぇだけだ！　って、やべ……」

一瞬高くなった声に、命司は思わず口を噤(つぐ)む。
その傍らで、ユートとサラは複雑な表情を浮かべて、顔を見合わせていた。
「……コイツの世界って、どうなっとんねやろな？」
「もしかして、褒(ほ)めるって行動が欠落してるんじゃない？　褒めたら負けとかさ」
「ないわ～……俺やったらムリ」
「でも、メイジ君で褒められないんだから、褒められてる人はどんだけ優秀なんだろね？　大量にこの世界に来てくんないかな？」
「そんなんなったら、お前お払い箱やろ」
「え～！　マイスターひっど～い！」
命司そっちのけで盛り上がる二人。だがそれを聞いて、命司はふと虚(むな)しくなった。
確かに、元の世界の時も、命司を褒める人間はいた。だが、いくら褒められても、それが空々しく聞こえて仕方が無かった。褒められたからといって、バイトの給料が上がる訳でもなく、逆に仕事ができなくても、雇用主(こようぬし)と仲が良かったり、年数を重ねていれば、その人間の方が給料は上だった。
「俺……本当に、ここにいていいのかな……」
思わず、命司はそう呟(つぶや)く。
自分を心から褒める人間がいることが、命司には信じられない。どれほど懸命(けんめい)に働いても、仕事場のために怒りや不満を抑(おさ)えても、結局、どこかで小狡(こずる)く動きまわったヤツがいい目を見る。そんな世界に、長く居すぎたから。
だが、ユートとサラは、唖然(あぜん)とした顔を向けた。
「……当たり前でしょ？　何言ってんの？」
「今更(いまさら)お前に抜けられたら、正直困るわ。このロリなんかより、よっぽど事務仕事できよるしな」
「あ～！　またロリって言った！　そんなに言うならマイスター結婚してよ！　あたしの女を試してよ～！」

「やか～しい！　お前相手やと、勃つもんも勃たへんわ！」
途中から話が怪しくなり、命司は思わず、
「ぶふっ！」
笑ってしまっていた。
（ま、いっか。確かに、ここで働くのも悪くねぇわ）
「……ま、そんじゃ、頼むでメイジ」
「りょーかい、マイスター」
おどけて言う命司に、ユートもにやりと微笑って見せる。
その傍らで、サラは、小さな紙袋を差し出した。
「あ、メイジ君、これ持って行きなよ」
「……これは？」
受け取りながら、命司はその小さな袋を眼前に掲げた。
「エラル殿、キミと同じくらいの歳みたいだからね。仲良くなったらいいんじゃない？　友達いる方が、楽しいよ？」
（気遣いは嬉しいが、だからって、何かの役に立つのか？　これ）
そう思いつつも、命司はそれを自分の服の袂に入れた。
「まぁ、相手は王族らしいしな。庶民の俺と友達っつーのも、イマイチピンとこないよな……でもまぁ、サンキュ」
「うん、がんばってね」
どこか悪戯っぽく微笑い、サラは頷いた。

◆◆◆

ユートとサラが事務所を出るのと同時に、命司もまた、エラルを伴って事務所を出た。
ユートの言葉通り、エラルは自分も探索に行きたいと言ったからだ。
悲痛な面持ちで、エラルは命司の隣を歩く。背は、命司より少し高いくらいだろうか。あの中年の騎士と比べると、華奢に思えてしまうほど貧弱そうな体格なのに、しかし重装甲の鎧に身を包み、背中には巨大な戦斧を負って、なおも命司に遅れることなく歩いている。
だがそれでも、王族だと言って納得出来るのは、その全身から滲み出る雰囲気だろうか。エラルはどこか高貴な雰囲気を確かに纏っている。面差しは秀麗で、髪と同色の少し太めの眉は、しかしながら男っぽさを感じさせず、どちらかといえば柔和な性格を表しているように思える。確かに、サラが好みそうな中性的なイケメンだ。もっとも、男である命司にとっては、どうでもいい事だが。
（さて、世間話でもしたいとこだが……相手は王族だしな）
無言で歩く気まずさに、そう考え始めたとき？？
「メイジ君……って、呼んでいい……かな？」
不意に沈黙を破ったのは、エラルの方だった。
「……は？」
虚を突かれた事もあり、思わず何のことを言っているのか理解できず、命司は立ち止まった。
「あ、ゴ、ゴメン。いきなり迷惑だよね……」
気恥ずかしかったのか、エラルは頬を微かに染めて、眼前で両手

を何度も交差させる。
「あ、いえ、別に構いません……呼び捨てでもいいですし。というか、呼び捨ての方が気が楽で……」
（なんか、気ィ弱いのかな……）
そんな事を考えて、命司は思わず苦笑してしまう。つい、ガキの頃の自分を見ているような気になってしまった。
「……あ、じゃあ、ボクの事もエラルって呼び捨てて。ボクも、その方が気が楽だし……敬語とかも、いらないから」
一瞬の沈黙。
だがそのあとに、
「っははははっ！」
命司は思わず笑ってしまっていた。
「変わった王族なんだな。緊張して損した」
命司の態度に、エラルもまた苦笑を浮かべる。
「そ、そうかな……ただ、メイ……ジ、ボクと年近いみたいだから……友達になれたらな……って、思って……」
（王族って、やっぱそういう辺りは不便なのかね）
王侯貴族の生活なんかに興味はないが、しかし、望む相手と話をするのもはばかられるような生活は、確かに窮屈に違いない。
「俺、客には丁寧だけど、友達には言いたいことズバズバ言う方だから。それでいいなら。ちなみに、メイジ・コーダって名前ね。歳は十九」
そう言いつつ、命司が手を差し伸べると??
「その方が嬉しいかな。じゃ、改めて……ボクはエラル・メ……いや、エラル・ハシュパカル。二十歳。ボクの方が一つ上みたいだけど……学年は一緒……かな？」
??エラルもまた、命司の手を握った。
「さぁ？　俺、学校行ってないから。でもまぁ、年上だろうが遠慮なく呼び捨てるけどな。じゃ、市場に急ごうぜ」
「あ、う、うん――」

駆け出す命司に、エラルも負けずに走り出す。

二章　王侯貴族と転移秘法　１１

◆　◆　◆

大都市ダ＝インの市場は、正門の西側に在る。中央を南北に走る大通りと、城壁に沿って環状に伸びる道。その外から三本目の環状通までが市場のエリアになっている。面積比で言えば、都市全域の五十分の一程度だが、毎日出入りする物資と、それに関する人員を含めると、総計で都市人口の五分の一に匹敵する人員がこの区画に集まる。

「へぇ、年末の市場みてぇだな」

話には聞いていたが、命司は実際に市場を歩くのはこれが初めてだった。

人ごみを掻き分けながら、命司とエラルは奥へ奥へと進んで行く。

「ねぇメイジ、ボク達、どうしたらいいかな？」

喧騒を押しのけるような声で、後ろのエラルがそう訊いてくる。エラルには、はぐれないように命司の衣装の端を握らせている。

（ってもな……まぁ、要はユートの邪魔になんなきゃいいんだろ？

その範囲なら、俺達で調べて当たり引いてもいいワケだよな？だったら……）

「まぁ、そうだな。ないとは思うけど、アクセサリーの店に出てるかどうか見て回ろう」

「あ、うん、そうだね！」

エラルが頷き、命司達は外周の環状通から一軒一軒見てまわる事にした。

市場は一見混沌として見えるが、それぞれの商品カテゴリ毎に区画分けされている。大きく分けて、工業製品、農産物、資源・資材の三つ。その三つのエリアで、更に細かな区画分けがされる。だが、細分化されているとはいえ、この商品の取扱店は『だいたいここい

ら辺に集まっている』という程度で、一つの店で様々な商品を取り扱う雑貨商などは、そんなカテゴリにも当てはまらない。
だから結局のところは、地道に一軒一軒見て歩くしかないのだ。
が、探索は予想外に困難を極めた。
というのも？？
「おい、いい加減、次行こうぜ？」
「あ、うん、あとちょっとだけ……あ、これもカワイイ～」
？？店を移る度にエラルが、色とりどりの世界中から集まった品々に眼を奪われているからだ。
（顔だけじゃなくて、中身も女っぽいヤツだ）
とは思うものの、ユートから指示された命令は見事に遂行できているワケで、無理に急かす必要もない。
「ねぇねぇメイジ、これ似合うかなっ？」
不意に、エラルが一組のイヤリングを両耳の前に掲げて見せる。
羽根型の房飾りがきらめく、全体的に白金のような色をしたイヤリングだ。
「おーおー、似合う似合う」
合わせる様にして、命司はスジ目で頷く。
「おじさん、これのデザインって、鷹の羽根でしょ？」
似合うと言われたエラルは嬉しそうに微笑んで、初老の店主にそんな事を訊いた。
「ああ、そうだよぉ？　アンタ、黒の国の人だね。買ってかないかい？　強い戦士の証だ、そりゃ」
（ああ、そういう事か）
店主の説明に、命司は納得した。つまりは、戦う男の身だしなみ、というヤツなのだろう。エラルがはしゃぐのも無理はない。
が、
「え、そうなんだ……じゃあ、ボクにはまだムリだね。修行中だから……あ、だけど買うよ。はい、これ代金」
店主に代金を渡すエラル。それなりに高額のハズだが、取り敢え

ずそれは置いておくとして??
「って、騎士見習いが知らなかったのかよ！」
思わず命司はそうツッコまずにはいられなかった。
「いや、あんまりカワイかったんで、つい……じゃ、じゃあ、次行こうよ」
あはは、と乾いた声で、エラルは笑った。
そんなエラルの調子に、命司は思わず連想した顔が在る。
（あ〜あ〜、前の世界にもいたよ、こーゆーヤツ。自分以外女ばっかの兄弟で、少女漫画とか読んで育ったヤツな。コイツもそれ系か）
だが、その友人はいいヤツだった。もっとも、少々天然でイラつく事もあるにはあったが。
「なぁエラル、お前、兄弟とかいるの？」
隣の店に移り、命司はふとそんな事を訊いた。が、エラルの立場を思い出し、慌てて言葉を繋げる。
「あ、いや、都合悪かったら言わなくていいぞ」
だが、エラルはアクセサリーを物色しながらも口を開いた。
「うん、いっぱいいるよ？　一番上は二十歳離れてるし、下は三人……かな。母様の子はボクだけだけど、父の同じ兄弟はいっぱいいるよ。まだ会ってないのもいるから、ボクも正確な数は覚えてないな〜」
（あらまぁ、重い話をかる〜く話しますこと）
再び命司はスジ目になる。話す本人に全く悲壮感がないところが、王侯貴族と庶民の違いだと思った。
だが、
「……あ、でも……」
不意に、エラルが口ごもる。同時に、何か思い出でも回顧しているかのように、ぼんやりと焦点の合わない眼差しを見せた。
「……その、なんだ……仲悪かったりとか、するのか？」
なんとなく気が引けたが、気になる事なので、思い切って訊いてみる。と、命司の一言で、エラルは瞳に光を蘇らせるとかぶりを振

った。
「……あ、いや……そんなんじゃなくて、ちょっと……姉、みたいな人の事、考えてたから……」
そう告げて、エラルは改めて命司の質問に気付いたように苦笑する。
「あ……えっと、仲は悪くないと思うよ？　だって、年に何回も会わないしね。それに、ボクは跡継ぎにはなれないだろうから、こうして自由にさせてもらってるし」
（跡継ぎ、って、王になるって事だよな。やっぱ、身内で権力争いとかあるんだろうなぁ）
大人しいが、だからといって『暗い』という雰囲気をエラルからは感じない。しかしそれでも、庶民には想像もつかないような悩みもあるのかもしれない。と、命司は思った。だが、それと同時に、もしエラルが王になるのなら、黒の国とやらの領民は幸せになれそうな気もする。
所詮、民主主義国家を謳っていても、欲にまみれた政治屋どもが国家運営をするのなら、暗君が治める国となんら変わらない。それならいっそ、王政で名君に支配された方がよっぽどマシだと思う。
「エラルは、王になりたいとか思った事、あるのか？」
思わずこぼれたそんな問いに、エラルは眼を丸くして、かぶりを振った。何度も何度も振った。終いには、両腕まで動員して全否定にかかる。
思わず命司はスジ目になってしまう。
「いや、そこまで否定しなくても分かったから」
「王なんて窮屈なだけだよ。それに、ボクはこうしてる方が気楽でいいんだ。キミと友達にもなれたしね」
エラルはそう言って、命司の顔を見据える。微笑んではいるが、その貌には、どこか寂しさのようなものが浮かんでいる気がした。なまじ秀麗な面差しなだけに、その微かな寂しさが見る者の心を揺さぶる。命司はそんな気がした。

「……あ、ああ……」
「……まぁね、いずれは王族として、自由がなくなる時が来るだろうけど……せめてそれまで、仲良くしてくれるとうれしいな」
（……そういう事か）
言葉とは裏腹に朗らかに微笑うエラルの貌を見据えながら、命司はそれに思い至った。今しがた感じたエラルの『寂しさ』の正体。それは、高貴な者のみが持つ、そして高貴な者にしか分からない悩み。
家に縛られるという事は、庶民でもありうる事だ。だが、そうだとしても嫡子以外の者にまで及ぶことは無いに等しい。『家は兄貴が継げよ』と、ただ一言言い置いて、自分は好きに生きていく。そんな生き方が王侯貴族にはできない。家名を汚さぬように、生きていかなければならないのだ。
しかし、それでも命司は思うことがある。
「自由……か。王族に自由が無いなら、貧乏人にだって自由はないぜ？　生きるために働かなきゃなんないからな。だから、お前と俺に、そんなに違いはないさ。……ま、まだまだ俺ら若いんだからさ、遊べるうちに、色々遊ぼうぜ？」
そう言って、命司はエラルの肩に手を置いた。肩当が胸甲に触れ、かちりと音をたてる。
が、エラルはどこか惚けたように命司の顔を見据えている。
「……どうした？」
かけられた声に反応し、エラルが我に返った。
「あ、いや……なんか、メイジってすごいね……そんな風に考えた事なかったよ。そっか、そういう考え方もあるか……いやほんと、すごいねメイジは……じいやみたいだよ、うん……」
何か納得できたのか、微妙なほめ言葉を紡いで、ひとり頷き続けるエラル。
（じいやって……それは、喜んでいいのか？）
エラルの背中を追いながら、命司は思わずスジ目になる。『じい

や』みたいとは、『老けてる』という意味にならないだろうか。そうも思ったが、一先ず忘れる事にした。
感心しきりに前を歩くエラル。と、その背が急に止まる。
「っと……なんだ？」
思わずエラルの背にぶつかりそうになり、どうしたのかと命司が視線を送ると、その先ではエラルが一点を見詰めて、生唾を飲み込んでいた。
エラルの視線の先を見る。そこは屋台で、棒に刺した巨大な肉を、回しながら焼いていた。元の世界で見たことのある中東料理の『シシカバブー』に似ているが、何の肉かまでは分からない。
「ねぇねぇメイジ、お腹空かない？　露店もだいぶ回ったし、お昼にしようよ」
「ああ、そうだなぁ……」
確かに、それは名案だ。メイジも肉の焼ける匂いで、急に空腹を感じた所だった。
「これね、黒の国の郷土料理なんだ。焼いてるのはクジラの肉だよ。これを……」
「パンに挟むのか？」
そう言うと、エラルは笑顔を見せた。
「その通り！　食べたことあるの？」
「いや、ないけど……そっか、クジラか。美味そうだな……」
この世界の『クジラ』が、元居た世界の『クジラ』なのかは分からない。が、この一週間この世界の食べ物を食べてきたが、命司は一度も食当たりを起こしていないし、それに何より、この匂いには抗い難いものがあった。
「ここはボクが出すよ。……おばさん、美味しいとこ二人分ね」
「あ、ああ、悪いな」
露店の女将に『二人分』とジェスチャーをするエラルに、命司は思わず苦笑した。
どうにもこういった事に、エラルは手馴れている感がある。ここ

で慣れたのか、それとも故郷で慣れたものなのか。そこまでは分からないが、やはりコイツは、普通の王族とは毛色が違うのではないか。と、命司はそう思った。

だがその直後、

「……あ、あれ？　あ、あれれっ？」

左右の足の付根にあるポケット。右のそれに篭手を外して右手を入れたエラルは、突然顔色を変えた。

「うあ～……またやっちゃったかなぁ……」

情けない貌をして、がっくりと項垂れる。

「なんだ、落としたか？」

「そうかも～……」

「あるいはスられた、とかな」

「……そ、そうかも……」

もう一つの可能性を命司が呟くと、エラルはさらに落胆した。

「じゃ、ここは俺が出すよ。おばさん、釣りくれ」

言って、命司は店の女将にユートから貰った金貨を渡す。価値は分からないが、恐らく釣りはあるだろう。そう思っていると、案の定、二人分の品物と、数枚の銀貨と銅貨が返ってきた。

「……ゴメン、メイジ……はぁ、ボクって情けない……」

項垂れたまま、エラルはため息をつく。

その様子に、命司は苦笑するしかなかった。確かに、この若い王族は王に向いてないような気がする。

「まぁまぁ、気にすんなよ。どうせまた会えるだろ？　友達なんだから。だったら、そんときにでも奢ってくれ」

言葉通りのそんな期待は微塵も抱いていないのだが、以前からのクセというか習慣というか、命司はそう言ってエラルを慰めた。大体、奢るなんてのは、余裕のあるヤツがすればいい。余裕がなければ奢るなんて言わなければいい。たまに何を勘違いしたものか、「いっつも奢ってやってるのに！」などと文句を言い始める輩もいるが、そんなヤツは論外だ。命司にとっては奢ってやりたいから奢っ

た。それだけの話に過ぎない。
「……キミは優しいね……なんか、一つって言ってもボクの方が年上なのに、人として、すごく負けてる気がする……」
再び、エラルは妙に感心したような視線を向けてくる。
「負けって……性格だよ、ただの性格。細かいこと気にしてたら、前の世界じゃ生きていけなかったからな……」
何の気なしに言って、買ったばかりの焼肉サンドイッチを手渡すと、
「……前の……世界？」
エラルはそう言って、小首をかしげた。
（……やべ）
思わず、焦りが命司の脳裏を満たす。
先日、ユートとサラと三人で、命司の素性は暫く隠していた方が無難だ、という結論に達していた。最低でも、戸籍を取得して市民権を得るまでは自重しよう、という事に決まったのだ。
「あ、いや、世界っつか、前に住んでたとこ。国、田舎、故郷な。実は俺、この都来たの、つい最近でさ。いやいや、ホント、ここって天国みたいなトコだよ！　うんうん！　さっさと、どっか落ち着ける場所見つけようぜっ？」
笑顔でエラルの背中を押しながら、命司は市場から一本外れた環状通を目指した。

◆◆◆

路地裏の民家の日陰に腰を降ろして、命司とエラルは昼食を済ませた。それぞれの手元には、デザート兼水分補給の意味で、市場の外れで買い足した柑橘系のフルーツもある。

「ああ、美味しかった。ごちそうさま、メイジ」

満足そうに微笑み、エラルは命司に礼を言った。

「……あ、ああ、気にすんな。さっきも言ったろ？　今度奢ってもらうさ」

そう言って、命司はそれ以上口を開かなかった。いや、この場合は『開けなかった』のだが。エラルと話すのは嫌いじゃないし、苦にもならない。どちらかといえば気が合ってる方だとも言える。が、それだけに、先程のように口を滑らせる可能性も高い。しかしこれでは余りにあからさまだ。エラルも妙な警戒（けいかい）心を抱くかも知れない。

そんな逡巡が、けっきょく命司を無口にしていた。

「その……ひょっとして……」

壁を背にして、命司の左隣に座るエラルは、視線を向けずにそう呟いた。

思わず命司の鼓動が早まる。

「なんか、怒らせる様なこと言っちゃったかな、ボク……」

「いやいや、全くそんな事ないぞ。ちょっと、エラルの捜し物のペンダントって、どんなのかな、って考えてただけで」

慌てて理由を見繕い、そう言って視線を左に送った時、

（うおっ？）

赤外線通信ができてしまいそうな程の正確さでエラルと目が合い、

命司は思わず視線を外した。
と、
「あははっ！」
不意にエラルが笑い始めた。
「ゴメン、意地悪だったね今の。ほんとゴメン。誰だって秘密くらいあるよね。……でも許してよ。ボク、こんなに誰かに興味湧いたことってなかったからさ」
「バ、バカ言うなよ。俺なんかに興味持ったって、面白いことなんてなんにも無いぜ？」
思わずエラルと反対方向に顔を背けてしまう命司。
（なんか、この世界に来てからモテてんな、俺。……主に男に）
元の世界で『路傍の石』と大差ない存在だった自分が、ここまで他人の興味を引くこと自体、異常事態なのだが。それでも悪い気分ではないと思ってしまうのが、命司はどうしてか悔しかった。悔しついでに、ロリではない女の子に興味を持ってもらえると言うこと無しなのだが。
「……もしかして、メイジってツンデレ？」
不意にかけられた言葉に、
「ツンデレってゆーな！」
命司は再度エラルに振り向くと、額に青筋を立ててスジ目で抗議した。
「あははっ！　ゴメンゴメン！」
（……遊ばれとる……）
楽しげに笑うエラルを見ながら、思わず何か寂寥の想いが去来する。
（まぁ、ネタにされるのはキライじゃないけど……）
そう思ったとき、ふっと、エラルが微笑んでみせた。
「……なんか、ほっとした。メイジって、そんな年相応のリアクションも見せるんだね。……ボク、てっきり別な世界から来た、ホントはボクよりずっと年上の人なんじゃないかって思ってたから」

（うん、『別な世界』は合ってる。お見事だエラル君）
「年上ね……」
命司は目を伏せ、元の世界の人生を振り返る。
「まぁ、ここの住人より、何倍も働いてきたから……かもな。ガキの小遣いみたいな日銭稼ぐのに、理不尽に怒鳴られたり、客の機嫌取ったり、酒ぶっかけられたり……そういう目に遭ってれば、イヤでもこうなるさ。……そうだな、めんどくせえ。……エラル、秘密守れるか？」
（あ～、ユート済まん。喋るわ俺……）
「その……ボクが聞いてもいい話？」
空気を察したのか、エラルは控えめにそう訊いてきた。
「いんじゃね？　バレたら、俺はどっかに連れてかれて、どうなるかは神のみぞ知る、ってヤツだけどな」
どうしてだろうか。同年代の友人ができたからだろうか。命司は滑り始めた口を、止めることができなかった。
不意に、エラルは命司の左手を両手で包むように握ると、とても真剣な眼差しを向けてきた。
「ボク、喋らないよ誰にも。だって、ボクはホントに、キミの友達になりたいんだ」
「じゃ、かる～く聞いてくれ。そんな大した人間じゃないから、俺は。……まず、俺はこの世界の人間じゃない。それから……」
要点だけ、できるだけ簡潔に。そして、三十分も話しただろうか。その間、エラルはずっと口も挟まずに命司の話を聞いていた。
元の世界がどんな所だったか。
離散した家族の事。
中学からずっと、家と学校とバイト先を往復するだけの人生だっ

た事。

生まれ故郷に戻るつもりはない事。

そして何より、あの生まれ育った国を、世界を憎んでいた事。

「……とまぁ、そんなとこだ。だけど別に、俺に限った話じゃない。俺のツレは、みんな同じ悩みと苦しみを抱えて生きてる。今でもな。だから、俺はむしろこの世界に来られてラッキーだったのさ。例え戸籍が無くても、仕事は楽だし、環境はいいし、なんだか知らねえけど、俺なんかに興味持ってくれる、いいヤツらもいるしな」

言って、命司は立ち上がると、苦笑しながらエラルに手を差し伸べた。

エラルは、ひどく深刻な顔をしていた。まるで、そんな世界など想像もできない、といったように。

（そんなヘコむくらい異常な世界なのか、俺の世界は……いやまぁ、否定はしないけど）

エラルの様子に、思わずそんな事を考える。

「……ボク、なんていうか……」

どこか憔悴しきったように、エラルは命司の手を取って立ち上がる。

「だから軽く聞けって言ったろ？　俺の世界では当たり前で、その当たり前が、こっちとは違うってだけの話さ。エラルが気に病む事じゃないし、俺が自慢出来る話でもない。俺は脱走してきた根性ナシなんだからな。……まぁ、どうしても気になるなら、脱出おめでとう！　って祝ってくれ。そっちのが嬉しい」

エラルは、命司の最後の一言に目を丸くした。そして？？

「……ぷっ！　ほんと、敵わないねキミには。一生かかっても、ボクじゃ無理だ」

？？クスクスと笑い始めた。

「だからさ、勝負事じゃねぇの。楽しくやろうぜ？　エラルにだって、俺にないもの沢山(たくさん)あるんだろうからよ」
「うん、そうだね。でも？？俺にないもの、それは身分。？？とかいうのはナシだよ？　それ禁句にするからね？」
「ヘンなコンプレックスだな、それ。ハナっから気にしてねぇよ、俺は異邦人(いほうじん)なんだから。身分なんざ知った事か」
　元より、王侯(おうこう)貴族などは命司と縁の無い遠い存在だ。それがいまさら身近にいた所で、態度を変えるつもりもない。
　だが、命司の言葉を聞いて、エラルは愉快(ゆかい)げに笑った。
「あははっ、ならいいけどさ」
「おっし、んじゃ、また手がかり探しに行くか！」
「そうだねっ！」
　冗談交じりに言葉を交わしながら、命司とエラルは再び雑踏(ざっとう)の中に飛び込んでいった。
　二人を見張る、二つの目に気付くことなく。

二章　王侯貴族と転移秘法　１３

◆　◆　◆

昼前に、ユートはサラを伴って、この国、いや、この世界で最大かつ最高の教育研究機関である国共大？？国際共立大学を訪ねていた。正確には、その最高責任者を、だが。

いま二人が居るのは、長大な廊下の中間に位置する、大学長の居室前だ。無駄に高さのある廊下と、その造りに合わせた目の前の扉は、やはり無駄に人の背丈の二倍ほどの高さがある。

「ねぇマイスター、お客さんの失くし物、探さなくていいの？」

傍らに立つユートに、サラが視線を向ける。

「えーねんえーねん。そんなもん、ここのコネ使ったら一発で見つかるやろ。明日の朝まで通行規制かけよるから、その間、街からは誰も出られへんしな。もっとも、転移秘法使えるようなヤツ絡んどるなら話は別やが、それならそれで、ここに来る意味もある。せやけど、それよりも……や。その失くしもんで、気になる事があんねん」

そう言って、ユートがニヤリと微笑ったとき、目の前の扉が内側に開いた。

「第六階位秘法師、ユート・ユーゼン殿、並びに第四階位武術士、サラ・アフメド殿、お待たせ致しました。どうぞお入り下さい」

中から出てきた中年の書記官は、そう言って二人を促す。

ユートは慣れたもので、堂々と室内に踏み入り、それとは対照的に、サラは緊張した面持ちで入室して行く。

「おう、我が校始まって以来の大秀才と大天才が、揃ってお越しか。相変わらず仲良しじゃなぁお主らは。もう一発ヤったか？」

「げ、出たよ、セクハラ発言」

傍らで嫌な顔をするサラの呟きが、ユートの耳に届く。
ユートとサラの目の前には、小柄な老人がいた。
遥か古のダ＝イン王朝より伝わる高級官吏の宝冠と、大仰な礼服で身を飾った小柄な老爺だ。髪は大部分が抜け、周囲に未練たらしく残ってはいるが、しかし元々が赤かったというその髪は色が抜けきり、昔の面影なぞどこにもない。
彼の名は、パウリ・フォルスストロム。
今年で齢九十歳。秘法師の頂点である第九階位にして、国共大の最高責任者だ。
「いえ、まだです。で、先生、お伺いしたいことがあるのですが」
「かるぅ～くスルーしおって。秀才殿は冷たいのぅ。……まぁ良いか。ワシもお主に訊きたい事があったのじゃ。どうじゃ？　情報交換といかぬか？」
（やっぱ、もうバレとんなぁ……ったく、このクソジジィ）
秘法の世界は奥が深い。どれだけ研鑽を積んでも『極めた』などとはとても言えない世界だ。だが、そんな秘法師達の中でも、それに近い者が存在する。それが、世界に二十名もいない、第九階位の秘法師だ。そしてその上で、目の前の老人は、その中でも更に飛び抜けた、言わば公式には存在しない『第十階位』としか形容できない力を持っている。
五大属性の中でも人気が無い黄色？？土を司る属性。しかしそれは、他の属性に比して『地味』だから、というばかりが原因ではない。制御は赤の属性なみに難しく、理解は黒の属性なみに難しい。そして、その応用は他のどの属性よりも難しいのだ。つまり、五大属性の中でも群を抜いて難易度が高いが故に、人気が無いのである。
その難しい黄色の属性の扱いで、目の前の老人の右に出る者はいない。
黄色の秘法師が持つ、地脈から情報を読み取る感知能力。それは、土の上にあるもの全てを把握する能力。そして、パウリほどの達人となれば、この都市程度の範囲であれば、どこに何があるのかなど、

すぐに分かってしまう。それはもちろん、『或る日突然に現れた人間』とて例外はないという訳だ。
「それでは、今現在分かってる事だけ、お話ししましょう。あとはまた、分かりしだい別の機会に」
「……フン、狐面のタヌキめが。そういうセコい考えでは、いつまで経っても借金完済はできんぞ？」
（……見抜いとるしなぁ……どっちがタヌキやねん）
不敵な笑みを浮かべるパウリに、ユートは思わず口元を引きつらせた。『分かってる事』。それは方便に過ぎない。つまり、ユートが確かめた、或いは確証に足る事だけを教えるつもりでいたのだ。だがパウリもまた、それと知っていてなお、了承した様子である。
ユートは命司の姓名、性別、年齢と容姿、そして、サラが体験した特殊な能力の事を話した。
「なんと！　言霊！　本当にそう言ったのか？」
「あ、はい……聞き間違いでなければ～……」
サラはユートの後ろに隠れるようにして、控えめにそう言った。過去に何があったものか、サラはパウリが苦手である様子だ。
「ほう、ほう、正に稀人来る、じゃな。老いぼれて人生も終わりかけたこの時期に、面白そうな事が起こったもんじゃなぁ……どうじゃユート。その小僧、ワシに預けんか？」
（まだまだ、あと五十年くらいフツーに生きるやろアンタは）
胸中でそう思いながらも、ユートは苦笑して見せた。
「いやぁ、適性あるかどうかも分かりませんし、アイツに渡せる属性宝珠もありませんしねぇ。……まぁ、それらの費用を国共大で負担していただけるなら、『預ける』くらいは構いませんけどね。アイツはもううちの従業員なんで、授業時間以外は返してもらいますけど」
「最近は、国共大も財政が逼迫しとってな。費用はこれっぽっちも出せんのじゃが……時にお主、戸籍の届け出は済んでおるのか？戸籍の無い者を囲っておれば、それだけで懲役モノの大罪じゃぞ？」

（やっぱ、そうくるわなぁ……まぁ、最低、第六階位級の社会的地位を持つ者二人が身元保証人になれば、戸籍の取得はできる訳やし……今回の一件が一段落してからでも、遅ないけど……）

そう思いつつも、しかしユートは焦っていた。猶予はあと三日。セイバー仲間の秘法師や武術士に、ここまで毎日かけあっているのだが、仲間たちも多忙な上に、厄介事に巻き込まれる事を警戒し、色よい返答はもらえていない。今回の命司の一件はあまりに特殊なために、そうおおっぴらにも出来ず、そうなれば、説得する仲間たちの反応もいよいよ硬くなる。悪循環もいいところであった。

だがそれでも、パウリと会見して安心した事もある。この国の実力者であるパウリは、少なくとも命司を『得体の知れない脅威』とは認識していないようだ。パウリの後ろ盾があれば、最低でも『異分子』として無碍に排除されるような事はないだろう。もっとも、命司のこれまでが全て演技で、『この世界を滅ぼす為に送られてきた』というような、三文小説並の馬鹿げた裏設定でも存在すれば話は別だが。

（……ま、あのマヌケなツラで、それはありえへんやろしな）

ユートもまた、人を見る目には自信を持っている。リスクを冒してまでパウリに面会を求めたのも、ある意味ではこういった展開を見越しての事だ。

「まぁ、ギリギリまで、こちらであと一人の身元保証人を探してみますよ。私も、メイジは気に入っていますのでね」

そんなユートの言葉に、パウリは目を丸くした。

「ほう、滅多に人を認めない秀才殿がの。どこが気に入った？」

「アイツは仕事の出来るヤツです。それに、私は元々、実力があるなら認める人間ですよ」

「……なるほど、それはいよいよ、会ってみたくなった」

愉快げに笑って、パウリは立ち上がるとユートとサラの脇を抜け、廊下に出て行った。そして、二人を手招きする。

「さて、今度はワシの番じゃな。庭に降りるから、歩きながら話そ

う。実はの、昨夜奇妙なものを見てな……」
移動の合間にパウリから聞いた事は、その半分が依頼人の話と合致していた。何者かが破った緑化結界と、転移秘法の痕跡。何より、パウリですら感知出来ないほどの深層に飛び去ったという話。
「それは、シリン先生にも話されたのですか？」
武専で講師をしつつ、構内の警備責任者でもある人物の名をユートは出してみる。
が、
「いや、その警備責任者様に、ちょっと勘違いされての……身体に意識を戻したら、そのまま意識不明になってしもうたわ。……で、目覚めたのがつい先程での」
「あ～……勘違い……ですか」
（どうせ自業自得やろ、ジジィ）
内心で呆れ果てながら、ユートはそんな事を考えていた。しかし、
（……せやけどまいったで……転移秘法使うて持っていかれとったら、依頼の遂行ムリやんか）
焦りがユートの胸中を満たす。事は一筋縄ではいかない可能性が出てきた。だがそれでも、パウリにはその感知能力を発揮してもらうつもりでいるが。

二章　王侯貴族と転移秘法　１４

◆　◆　◆

長大な廊下の端の階段を降り、大学の中庭へと出ると、柔らかな日差しが三人を包んだ。

「良い季節になったの～……まぁ、標高が高くて赤道直下のこの国に、四季らしい四季はほとんどない訳じゃが。それでも春は嬉しいものよ」

「で、先生、どう思います？」

依頼人の名は伏せたが、捜索対象であるペンダントの特徴は告げた。特殊な加工が施された黒曜石のペンダント。大粒の黒曜石の表面には、柄に二匹の蛇が絡みついた、戦斧の紋章が刻印されているという。

「古代ダ＝イン王朝の秘宝の鍵……かもしれんの。まぁ、この一件、ちと厄介じゃ。深入りして得なことはないぞ？」

特に感慨もなさそうに、パウリは宝冠を持ち上げて禿頭を掻いた。

「……ですよねぇ」

ユートは苦笑を浮かべる。

古代ダ＝イン王朝の秘宝と、それに纏わる鍵の伝説。鍵が四つそろうと、莫大な『何か』が手に入ると言われている。ある者はそれを財宝だと言い、ある者はそれを究極の属性宝珠だと言い、またある者は、それがダ＝インを滅ぼした元凶であるとも言う。

だが結局のところ、秘宝も鍵も、正確な事を知っている者はいない。鍵については、赤、青、白、黒の宝石だと言われているが、それが本当なのかも分からない。そして、それにつけ込んで、その『伝説』を利用して一儲けを企む輩も多くいる。この手の話題は常にロマンに溢れ、人々の冒険心を煽るが、同時に痛い目に遭う可能性も高い。もし仮に、それが本物だとしても、だ。

いや、本物であれば、なおさら危険度は増すだろう。財産どころか命までも危険に晒す事になるかも知れない。
だから、ユートにとって、依頼を受けた品物の正体に関する独自調査はここまでだ。もし本物であれば、これから行う秘法でパウリがそれを見つければ、何らかのリアクションを見せるだろう。そうであれば持ち主に返すまで、少々用心が要る。それだけの話だ。
「さて、それでは始めるか……サラ、術中、ワシの無垢な身体にイタズラするでないぞ？」
「しませんよぉ～、そんなコトぉ……」
パウリの一言一言がよほどカンに障るのか、サラは額に青筋を浮かべ、全身を戦慄かせていた。
パウリはしゃがみ込むと、芝生の生えた地面に人差し指を突き刺していく。
刹那、パウリの瞳が虚ろになったかと思うと、彼の足元から『気配』がどこかへと去っていった。
「……なんか、武専の方に行ったけど……」
サラがどこか憮然（ぶぜん）と一呟く。
と？？
「あのジジィ、また女子のシャワー覗きに行ったんじゃないでしょうね？　無駄だって事、いつんなったら学習するのかしら」
不意に、ユートとサラの背後から、忌々しげに響く女性の声が聞こえた。
振り向くと、そこにはサラを縦に伸ばしたような、秀麗な女性が立っていた。南の国？？サラと同じ赤の国出身の武専教師だ。褐色の肌色に、セミロングのボブカットにした亜麻色の髪と、サラのものに似た民族衣装が良く似合っている。一見して二十代半ばくらいに見えるが、その実、既に七十を超している人物だ。
「ご無沙汰してます」
言って、ユートは会釈した。シリン・メフルダード。それがこの女性の名前だ。彼女はサラの恩師で、そして、武術士と秘法師の二

つの資格を併せ持つ、世界でも数少ない人物でもある。
「シリンせんせ〜っ！」
きゃ〜っ！　と黄色い声を出しながら、サラが飛びついていく。
が、
めり……。
そんな不快な音がして、サラはシリンの拳によって撃墜された。
「先生……ヒドい……」
サラは一撃を喰らったほっぺたを押さえ、滝のような涙を流しながら、その場に突っ伏した。
「おおう、これはスマン、つい反射的に。だけどサラ、お前少しなまってんじゃないのかい？　組み手の相手してやろうか？」
その一言で、サラは一転して喜色を浮かべた。
「ほんとっ？　先生忙しくないのっ？」
「ん〜、まぁ、このクソジジィに用事があったんだけどさ。なんかやってるみたいだから、終わるまでの間ならいいよ。……つか、コレ、アンタ達がらみ？」
腕を組み、シリンは指だけでパウリを指し示す。
（相変わらずやな、シリンのバァサンも）
ユートは思わず苦笑する。シリンの言葉、『コレ』には、パウリの秘法もさることながら、パウリ本人も含まれている。シリンはこの大学？？いや、この世界で唯一のパウリの天敵だ。
「ええまぁ、ちょっとした交換条件で、捜し物を」
「そりゃいい。精々コキ使ってやんな。ったく、ヒマがありゃ、セクハラばっかしてんだからこのジジィは」
ユートの言葉に、シリンは忌々しげにそう返す。
すると、サラが自分の両肩を抱いて身震いした。
「うわ〜……きっとアタシも、隅から隅まで見られてたんだろうなぁ……」
「う〜ん……アンタは微妙だけど……可能性はあるかもねぇ……『女体に国境はナイ！』とか抜かしてる変態だから……ところでサラ

……」
不意に、シリンは卑猥で邪悪な笑みを浮かべた。
「……もうユートに女にしてもらった？」
囁くように続いた言葉に、サラの貌が真紅に染まる。
（冗談真に受けんなやアホが……ったく、結局、同属嫌悪やろこの二人）
頭痛のタネが増え、ユートは思わず頭を押さえた。秘専で学生をしていた頃から、既にパウリとシリンの掛け合いは有名だった。言動を含め、露骨なセクハラを得意とするパウリと、それを下品と断じて、趣深い言動でセクハラ発言を繰り返すシリン。光と闇。動と静。表と裏。結局のところ、この二人はそういう位置関係に過ぎない。
「えっと……は、はい」
こくり、と小さく頷くサラ。
「コラコラコラ！　えーかげんな事抜かすなボケ！　ナニあさっての方向に誘導されとんねんお前は！」
思わず、ユートは眉を釣り上げた。
「え～？　……ちょっと願望言ってみただけだよ、マイスター……」
不満そうにサラが眉根を寄せると、
「ぷはっ！　あはははははっ！」
シリンが笑い出した。
「ひ～！　相変わらず面白いねぇアンタ達は！　っと……そうだ。ユートあんた、ちゃんとジジィ見張ってなさいよ？　気ぃ抜くと、寄り道したりするからね」
「……いや、そうは言っても、施術中に動かすワケにもいかないですし……だいたい寄り道してるって、どう見分けるんです？」
ユートの問いに、シリンはにんまりと微笑った。
「そんなのカンタンよ。まぁ、アンタ達ちょっとおいで」
言って、シリンはパウリの眼前にしゃがみ込むと、同様にするよう二人に促した。

「……ああ、なるほど。さすがは学長の天敵シリン先生」
思わずスジ目になってしまうくらい、ユートは納得できた。
眼前で俯くパウリの表情が、これで読める。九十を過ぎてなおも現役の学長は、頬を染めてだらしなく口元を歪めていた。
「……まさか、女子のシャワー覗いてるんじゃないよね？」
サラの呟きに、しかしシリンはかぶりを振った。
「今は大丈夫。秘専武専の女子寮や、浴場、トイレ、その他諸々には、私の緑化結界張ってるから。基本的には結界が邪魔になって覗けないし、万が一覗いても、すぐ分かるようになってるってワケよ。ただ、今はちょっと、西の寄宿舎で一部結界が綻んでるとこがあってね……仕方ないから、女子生徒には復旧の間は大浴場使うように言ってるんだけど」
（……なるほど、ジジィの言葉と一致するな）
シリンの説明を無言で聞きながら、ユートはそう思った。だとすれば、それは綻んだのではなく、破られたという事だ。そしてシリンもまた、その事は承知であるに違いない。彼女がパウリを訪ねたのは、恐らくそれに関連する事だろう。だとするなら、相手はただの盗賊団ではない。高度な転移秘法を使える高位の秘法師が仲間にいるか、あるいは背後に存在する。この一件は慎重に、そして急いで解決する必要があるかも知れない。
「……って、そんな事できるなら、あたしが在学中の時にやっといて下さいよぅ」
シリンの説明にも、しかしサラは不満そうに頬を膨らませた。
それを見て、シリンは苦笑を浮かべる。
「アンタの時から計画は進めてたんだけどね？　緑化結界はそれ用の木を植えて、ある程度育たないと効果薄いワケよ。ジジィはジジィで、地脈操って養分枯渇させようとしたりとか、目一杯抵抗してくれたしね……あ～、思い出したら腹立ってきたわ」
シリンの笑顔に青筋が浮く。
「……まぁ、学長のお守りが大変なのは分かりましたけど。でも、

寄り道してるのが分かったところで、どうやって方向修正させます？」
ユートの疑問に、シリンは再び邪悪な微笑みを浮かべた。
「秘法師だって生き物だしね。肉体が生命の危険を感知したら、精神もそれを察知するわよ。じゃ、みんなでやってみましょうか。二人とも立って？」
どこか嬉しそうに微笑みかけながら、シリンは優しく促す。そして、ユートとサラもまた、言われた通りに立ち上がった。
「そしたら、はい、片足上げて？」
二人ともにシリンの指示に従う。それを見てシリンは満足げに微笑むと、その笑みに強烈な怨念を乗せた。
どこか、見る者を恐怖の底に叩き込むような、そんな壮絶な微笑み。
そして、凪の湖面のように穏やかな言葉が一つ。
「……踏め」
刹那、三つの靴底が、一斉に学長の身体に振り下ろされた。特にシリンの足が、容赦なく目一杯踏みつけている。
恩師を足蹴にしながら、ユートは傍らの女性を横目で見て改めて思った。
（……俺、この人だけはゼッタイ敵に回さんとこ）

◆◆◆

「え～……困ったな。ちょっとやり過ぎじゃないですか？　学長、虫の息になってますけど」
　数分後、機嫌の直ったシリンの様子を確認して、ユートはケリを止めた。
　散々蹴っておいて何だが、学長はボロ雑巾の様になっている。時々痙攣するのは、まだ意識が地脈の中にいるからだろうか。
「ん～……秘法医呼んだ方がいいかもねぇ」
　さすがにやり過ぎたと思っているのだろうか。シリンは、冷や汗を頬に貼りつけていた。
「いや、学長の生死はどうでもいいんですけど、どうしてくれるんです？　せっかく交換条件で働いてもらってたのに」
「交換条件ね……それは、メイジという名の異邦人の件……かな？」
　最高学府の最高権力者。その生死をものともせず、しかしシリンは不敵な笑みを浮かべて両腕を広げた。
　ユートはため息をつき、頬を掻く。
「さすが学内一の情報通、シリン先生ですね。その情報はどこから？」
　ユートがそう訊いた刹那、シリンの両腕に、無数の小鳥が舞い降りた。その姿は、まるで女神の様。口さえ開かなければ、大多数のオアシス出身者がそうであるように、シリンもまたエキゾチックな美しさに満ちている。そのまま彫刻の題材にされても違和感が無いと思ってしまう程に。
　シリンは両腕に止まった小鳥たちに視線を向ける。
「……ほほう、そうなんだ……へぇ、なるほどねぇ。それで？　…

…うんうん。……ははぁ、そういう事か……」
数羽の鳥達と会話をするよう呟くと、シリンはにんまりとした笑みを浮かべた。
「ユート、アンタ達が探してる物って……とある王族のペンダントだろ。それも、黒曜石の特別な品。まだ都にあるようだよ？」
ユートは一瞬目を丸くすると、直後には納得していた。
（鳥寄せと……青の秘法か）
木？？広義で言うと、『生命』を司る青の属性。第四階位とはいえ、その属性の使い手であるシリンは、草木や動物と意思の疎通が出来るのだろう。ユートも実際に目にするのは初めてだが、しかし理解はできた。彼女の情報源と、その能力の便利さについて。
「タダで、……ってワケにはいかないですかね？　その情報」
かなりの情報を知っていると思われるシリンに、ユートは一応商談を持ちかけた。が、案の定、小馬鹿にしたようにシリンは微笑う。
「それはムリだねぇ……」
「ま、言ってみただけです」
即答に対し、ユートもまた自嘲ぎみに微笑う。と、
「でもま、カワイイ教え子の依頼みたいだから、今回だけ特別に協力してあげるわ。それに、ちょっとこの都の治安にも関係してるみたいだし」
そう言って、シリンは小鳥たちを大空に放つと？？それまで見せなかった様な、真面目な貌を見せた。
「盗賊団が街に入ってる。まぁ、頭目以外は雑魚っぽいから、アンタ達なら余裕じゃない？　とはいっても、慎重に下調べはした方がいいと思うけど」
「ん～……今度から、学長よりシリン先生の方に頼むとするか……」
ユートは眉間に人差し指を当て、真剣に考えた。情報の正確度に仕事の早さ。どれを取っても優秀な情報源だ。これを活用しない手はない。
だが、

「いいわよ？　ユートを一晩好きにさせてくれるなら」
不意にシリンはユートの肩を抱きながら、頬と首筋に指先を這わせた。
「うわ～！　ちょっとシリン先生！　本気出されたらあたしに勝ち目ないじゃん！」
『女』全開の恩師の様子に危機感を感じたのか、サラが涙目で抗議する。
（あ～、どっちにしたって面倒やなぁ）
パウリはやる気の問題と共に同等の対価を要求してくるし、シリンは扱いが難しい上に、サラの嫉妬がオマケで付いてくる。そう考えればどちらが良いとも思えない。そんなワケで、こういう時は流すに限る。
「で、ソイツらの根城は？」
「あら、華麗にスルーしたわね。……まぁいいわ。ヤツラのアジトはね？？」

三章　盗賊団とその頭目　０１

夕刻。
命司とエラルは、人影もまばらになった市場の一角、その城壁の下にいた。
「……お腹減った……」
城壁に背を預け、エラルはへたり込んでいる。
その右隣では、命司もまた立ちながら、城壁に背を預けていた。
店仕舞いの始まった時間。城門もまた程なく閉じられる。
この時間まで露店を巡っても、結局露天商からはその現物はおろか品物の情報も得られなかった。露店の売り物全てに目を通し、もっと別な品物は無いかと訊く。それでも色良い返事が無いのなら、店主に留意しておくように告げた。
（……ま、素人探偵が、ハナから上手くいくとは思ってなかったけどな）
淡い期待が甘い期待だったと悟った時、命司はふと、服の袂に何かが入っているのに気が付いた。
カサリ、とした軽い触り心地。手に取って袂から出してみると、それはサラから貰った小さな袋だった。
（そういや、コレの中身なんなんだろうな？）
袋の口を縛るヒモを解く。中に入っていたのは、素朴な焼き菓子だった。
「……クッキー？　みたいなもんか？　エラルも食うか？」
様々な形の焼き菓子。それを一つ口に放り込むと、命司は袋をエラルの眼前に差し出した。
「あ、コレ……赤の国のラスクだね。ボク大好きだよ！　ありがとう！」
よほど好物であるのか、エラルは袋を受け取りながら、満面に笑

みを浮かべる。
「そっか、んじゃ、それ全部やるよ。あんまし入ってないみたいだけどな」
ボリボリとラスクを噛み砕きつつ命司が言うと、エラルはどこか気恥しそうにしながらありがとう、と礼を言った。
エラルはラスクを齧ると、しげしげと袋を観察して口を開く。
「美味しいね。コレ、メイジが作ったの？」
「そう思うか？」
にんまりと笑いながら命司がそう返すと、エラルは苦笑を浮かべた。
「あんまりイメージじゃないとは思うけど……ね」
「うちの事務所にサラってちんまいのいたろ？」
「ああ、あの赤の国のお姉さん」
返ってきたその一言で、命司は軽く驚いた。
「……え、お前、サラが年上だって知ってたの？」
どこからどう見ても、サラは小学生にしか見えない。ユートも『ロリ』を連発してるし、誰でも同じ反応をするものだと命司は思っていた？？のだが。
「……ああ、そっか。命司の世界には、そういう種族はいないんだね～」
どこか納得した様に頷いて、エラルは命司を見上げた。そして、話を続ける。
「南の国？？赤の国の人は、荒野に住む『荒野の民』と、オアシスに住む『森の民』がいるんだよ。サラさんは、荒野の民の方だね。ボクもちょっと見ただけなら、荒野の民の成人と子供はあんまり見分けがつかないけど、話せば物腰でなんとなく分かるよ」
「スゲェなお前……じゃあ、ユートもロリロリ散々言ってるけど、分かってて言ってるのか」
雇用主と仕事仲間の掛け合いを思い出し、命司は思わずスジ目になってしまう。

それを聞いて、エラルはまた苦笑を見せた。
「ひどいねユートさん。まぁ、異種族婚は結構あるけど、荒野の民が好きって人は、男も女も限られるからね。……まぁ、確かに一部では絶大な人気はあるんだけど……」
どこか、途中から笑顔を引きつらせて、エラルはもう一枚ラスクを口に運んだ。
命司もまた、思わず口元が引きつる。
（ああ、やっぱこの世界にも、そういう趣味のヤツいるんだな……合法ロリってヤツか）
他人の趣味をとやかく言うつもりはないが、思わず広場で聞いたサラの一言が脳裏を過ぎり、嫌な汗が滲む。
??嘘だったら、煮るなり焼くなり好きにしていいよ。えっちな事もしたい放題って事で！??
女性として好きになれれば可能ではあるかも知れないが、一先ず、今のところはパスだと命司は思った。サラとそういう関係になるなど、想像しようとしても、脳内補正でその先にモザイクがかかってしまう。つまり、命司には想像不可能な領域だ。
そんな命司の胸中を見透かしたかのように、不意にエラルが口を開く。
「ねぇ、メイジは元の世界に好きな人とかいたの？」
無邪気な笑顔から出た質問が、刹那、命司の心を深くえぐる。
（そうきたか……ここは見栄を張るか？　それとも正直に言ったら、妹とか紹介してくれる的なフラグなのかな？　いや、王族だからそれはねぇな。じゃあ同級生とか。しかし、ツレんなったばっかのヤツに、そんな打算的なのってどうよ？　ああメンドくせぇ、一度見栄張ると、ボロ出たとき恥ずかしいしな。まぁ、コイツ男だし、いっか）
一瞬でそこまで逡巡し、命司は口を開いた。世の中、脚色はいいが嘘はイカン。と、そんな結論に達したいう訳だ。
「……いや俺、貧乏だし、バイトバイトで時間ねぇし、付き合うに

もデートで使える金ねぇし、金ねぇからバイトしてたし、バイトで時間ねぇからナンパもできねぇし……って、貧乏と時間ねぇ、の、デフレスパイラルじゃねぇかよ、俺……」
　改めて気付いた現実に打ちのめされ、命司は崩れ落ちるようにして両手を地に突き項垂れた。
「ああ、ゴメン！　なんか触っちゃいけないスイッチ押しちゃったんだねボク！」
　エラルが慌てて顔を青くする。
「えっと、それじゃ、その、メイジはどんな女の子が好み？」
（こっ、コレはっ？）
　どん底に落ち込んだ命司の頭上に、蜘蛛の糸が降りてきたような気がした。
「……それは、淡い期待を抱いていい質問なのか我が心の友よ？」
　思わず歪む視界の中、命司は今この瞬間に、友人から親友へ昇格した者の顔を見つめた。
「ま、まぁ、その、メイジの好み次第では……さすがに、好みに合わないならボクも無理にとは言えないし……ボクは全然構わないんだけど……そんな、泣くような事？」
（くっ、この余裕。王族だからなのかっ？）
『そんな、泣くような事？』の一言で、命司は親友に一瞬殺意を抱いた。
「バカヤローお前、俺の世界じゃ十九にもなって彼女いないってだけで、人には言えない欠陥があるんじゃない？　とか、ホモなんじゃない？　とか、二次、ペド、ケモノ、草食、などなどなど、勝手にキモい分類のタグ付けられて、まるで人間じゃない扱い受けるんだぞっ？　その辛さが、お前っ！　神様、俺がいったい何をしたって言うんですか！」
　眼前で拳を握り締め、滝のような涙を流す命司。その様子に気圧されたのか、エラルが苦笑いを浮かべた。
「いや、うん、分かったから……それで、メイジの好みはどんなコ

？」

エラルは命司の肩に手を置き、話の続きを促してくる。

「あ～、そうだな、俺の貧乏は気にしない、ってのが必須条件だな。あと、俺も別にイケメンじゃないから、容姿でそんなに高望みはしないけど、カワイイなら言うことないな。……あとはまぁ、そこそこ家事できて、料理もうまくなくていいから、俺に作ってくれようとする姿勢があると二重丸だ。……まぁ、いいけどな、条件なんて。結局のトコ、俺の事好きになってくれるんなら贅沢言わない」

「でもそれじゃ、容姿の好みの傾向が分からないなぁ……あ、そうだ。例えばね？　ボクにそっくりな双子の姉か妹がいると想像してみて？　髪型まで一緒な感じで。それはアリだと思う？」

（……それは自慢も入ってるのか？　ナチュラルに）

そう思わなくもないが、王族なら世間知らずだろうという事で、命司はひとまず置いておく事にした。そして、それを踏まえｓた上で、改めてエラルを見てみる。

おっとりとした印象を与える細面。

白銀の髪は綺麗なストレートのロングヘア。

眉はやや太目だが、またそれが、無垢な印象を与える眼差しを引き立てるアクセントになっている。

女にしてみれば『守ってあげたい』系の顔立ちだろうし、それは仮にエラルが女だったとしても変わりはなく、少女というには年齢的に少々外れるかも知れないが、間違いなく『美少女』と呼べる印象を与える顔立ちだ。

山羊の角みたいのが生えてるのは多少慣れが必要だが、元々人間の女とは縁もゆかりもない人生。特に問題は無い。いや、むしろ慣れればこれはこれで味わい深いものかも知れない。

そう、『アリ』か『ナシ』かという二択であれば、これはもう、文句なくアリである。無論、『アリ』『ドチラトモイエナイ』『ナシ』の三択でも結果は同じだが。

命司は無言で、エラルの両肩に手を置いた。無骨な甲冑が音を立

て、それがまた惜しいと思わずにはいられない。そして、この感想も言わずにはいられない。
「……完敗だエラル君。キミが女で、かつ俺にも目があるのなら、俺はキミに『付き合って下さい』と言ってるだろう。イケメンのライバルがいたら、っていうか、確実に周囲がほっとかないだろうから、実際に行動するかどうかは別問題だけどな」
命司の感想を聞いて、エラルは刹那、目を丸くして顔を真紅に染めた。
（……そこで赤くなられてもな）
思わず命司はスジ目になる。自分で自分をダシにして例を挙げておきながら、赤面するというのはどういう羞恥プレイだろうか。
「……ねぇメイジ、キミ、武専か秘専に入る気ない？　そうしたら、たぶん問題解決すると思うんだ」
唐突にそんな事を言われ、命司は二の句が継げずに沈黙する。
（やっぱクラスのコ、誰紹介してくれる気満々？　エラル似って事は、身内ないし、同郷人か？　いや、だがしかし……）
「う～ん……ユートにはダメ出しされてるしな。金が無い、って事で。それに秘専に入るには、バカ高い属性宝珠ってのが必要なんだろ？　かといって武専行くにも、俺ケンカ苦手だしなぁ。相手殴ったりとか、ムリだから」
「……え、属性宝珠って、そんなに高価なものなの？」
不意に、エラルが焦りに似た奇妙な笑顔を見せる。と、ズボンの左ポケットに手を入れ、命司の前に『それ』を出して見せた。
「なっ……おまっ……そ、それっ？　まさかっ？」
エラルの掌の上で、鈍く光る真球。ラグルが出した『報酬』と大きさはそれほど違いそうにないが、しかしその色は『報酬』とは違って黄色だった。
小さな街や村が余裕で買える代物。確かユートがそんな事を言ってたような気がする？？と、命司は唖然としたままに思い出していた。

「……落としたかスられたか知らんけど、失くしたのが財布で良かったな……」
どこか感涙に近い涙を流しながら、命司はもう一度エラルの両肩を叩く。
「あはは……そ、そうだね。……じゃあ、はい、これ」
「……あ？」
エラルの行動が、命司には一瞬理解出来なかった。エラルは、属性宝珠を命司の手に握らせたのだ。
「それ、あげるよ」
続いた一言に、命司の思考は一瞬フリーズした。が、刹那にその呪縛が解けると、命司は目を丸くして口を開いた。
「バっ！　バカ言うな！　こんな高価なもん受け取れねぇよ！　俺だって多少のプライドくらいあるさ！　俺を友達だと思うんだったら、こんな事しないでくれ！　負い目ができちまうよ！」
命司の剣幕に、エラルは一瞬眉根を寄せた。が？？
「……ゴメン、また誤解させちゃったかな。違うんだ。聞いてメイジ。それは、ボクが持ってるボク個人の所有物で、ボクが自由にしていい物なんだ。父は、本当はボクに使わせたかったみたいだけど、ボクは秘法より武術を選んだから、それはボクが持ってても意味のないものなんだよ。それに……」
エラルはもう一度命司の左手に宝珠を握らせると、その手を両手で包み込んだ。
命司は思わず言葉を失う。夕闇が迫る中、エラルの色白の顔が日陰にも映える。その眼差しは、真剣そのものだ。
「……ボクはこのままだと、いずれ自由を失うよ。でも、もしメイジがそれを持って秘専で勉強して、秘法師になって？？そして、誰もが認める力を持ってくれたら。……そんな人物の言葉なら、父も耳を傾けるかも知れない。だからボクは？？キミがボクを？？」
それ以上は、どうしてか言葉が出てこなかった。
王族とはいえ、自由にできないものもある。いや、本当に、意の

ままの人生を送れる人間などいるのだろうか？　そんな自問が命司の脳裏を過ぎった。
（まぁ、でも、これはチャンス……なんだよな。姉貴の実験で飛ばされた後も、俺はこの世界を自分で選んだ。その時点で、俺はもう綱渡りの人生で……だったら、前に進めそうなら、少しでも進まないと）
「……ゴメン、迷惑……だよね？　でも、それはメイジを哀れんでとかじゃないから、それだけは……分かって欲しい」
「手ぇ離せよ、エラル」
自身の気持ちを呟くように告げるエラルに、命司は一言そう言った。
「……ゴ、ゴメン……」
力なく、エラルは手を離す。その顔を見ると、今にも泣き出しそうに見える。
そんなエラルに、命司は宝珠を掲げてみせると、にんまりと微笑ってみせた。
「で、お前、これの使い方知ってる？」
「……え？」
目尻に涙を滲ませ、エラルは驚いたかのように顔を上げた。
「交換条件なんだろ？　それなら望む所だ。今日奢った飯代は、いつか奢って返してくれ。俺は、今日もらったこの属性宝珠の価値以上のものを、いつか絶対返してやる。……出世払いでいいなら……だけど」
途中で自分の大言壮語に気付き、命司が最後に一言付け足すと？？
「うん！　それでいいよ！」
エラルは満面の笑顔で答えた。
「えっと……それね、使い方としては飲み込むんだけど……ユートさんか誰か、秘法師に立ち会ってもらった方がいいと思うよ……万が一、体質に合わなかったら大変だから」
「合わなかったらどうなるんだ？　ユートのヤツは、三日三晩寝込

む、とか言ってた気がするけど……」
「それは、まだ軽い方だね。属性宝珠は飲み込んだ直後から、体内でその属性の法力を生産しようとする。法力は人間の体内でも、少量ならごく自然に生産されるんだけど、体質に合わない大量の法力は体内の調和を乱すらしいんだ。だから、お酒で二日酔いになった時みたいに、気分が悪くなるんだよ。法力が体内から消失するまで、ずっとね。……だから、気分が悪くなってすぐに宝珠を吐き出せたとして三日。それができなければ??」
「あ〜、うん。理解した。死ぬかもな。でもまぁ……」
（ユートに立ち合わせて、宝珠取り上げられても事だしな。忠告は有り難いが、酒にゃ強ぇんだよ、うちの家系は）
命司は袂からフルーツを取り出して一齧りする。口中に流れ込む、柑橘系の甘酸っぱい味。それを口に溜めたまま??
「って、メイジ！　ボクの話聞いてなかったのっ？」
??命司は宝珠を口に放り込むと、一気に飲み込んだ。
刹那、
「ぐふっ！」
思わず、命司は呻いた。
「だから言ったのに！　吐き出して！　早く！」
必死な様子で、エラルは命司の背を叩く。が、命司はその手を制した。そして??
ゴクリ……
大きく喉を鳴らし、属性宝珠がようやく命司の喉を落ちていった。

三章　盗賊団とその頭目　０２

「……ぶはっ！　喉詰まって死ぬかと思ったぜ。……で？　俺は成功？　失敗？」

特に異変は感じない。二日酔いみたいな気分の悪さも無ければ、しかし身体に何らかの力が漲ってくる感覚も無い。

「……も～……焦らせないでよ……やめてよね？　そういうの……」

緊張の糸が解けたのか、エラルは再び壁に背を預けた。言葉通りの微かな憤懣は貌にも浮いているが、しかし直後に命司に向けた眼差しは、笑っていた。

「おめでとう。その様子だと、成功したみたい」

「お、おお……」

無意識に、感嘆の声が命司の口から漏れる。意外とあっさりではあるが、話を聞けば『苦しんだら即終了』のようだから、『苦しんだ上で克服する』という、少年漫画的見せ場が無くても全く問題はない。

「で、俺、どうやったら秘法使えるんだ？　今の俺、何が出来る？　攻撃呪文とか使える？　ってか、呪文とか唱えんの？」

努めて喜びを抑えつつ、命司は訊いた。本当ならエラルを抱きしめてファーストキスを捧げてやりたい所ではあるが、諸般の事情？？相手が男だとか、相手が女じゃないだとか？？により自重する。

と、エラルは可笑しげに笑った。

「呪文？　って、詠唱師のスペルの事かな？　あれは流派とかあるし、習わないと使えないよ。紋様師のサインも一緒。攻撃呪文ってのもよく分からないけど、秘法は属性の応用だから、まずは黄色？？土の属性で何ができるかを学ばないとね」

エラルのそんな説明で、命司の熱は一気に冷めた。

「……まぁ、その為の秘専、ですか……」

「そういう事。ボクは専門じゃないから詳しくはないけど、高位の

秘法師になると、色々できるみたいだよ？　黄色は黒？？水の属性に強いから、黒の術を破りやすいし、赤？？火の属性から力を与えてもらえるし。それと、白？？金の属性に力を与える事もできて、地面から金属の武器を取り出してた秘法師も見たことあるよ」
「便利そうだけど……サラ姐さんの言う通り、やっぱ地味だな？武器出せても、俺には使えないじゃん」
（早まったか……火とか水とか、なんかハデそうなのにしときゃ良かった）
どうしてか、寂寥の想いが命司の脳裏を駆け抜けていく。
そんな時だった。
「お二人さん、なんか　捜し物があるんだって？」
不意に、そう声を掛けてきた者がいる。
命司とエラル。二人同時にその声の主に視線を向ける。そこには、一見して旅人のような薄汚れた風体の男が立っていた。年の頃は三十半ばくらいか。髪は茶色で、命司の世界で言うところの白人系の顔立ち。だが、それ以外にこれといった特徴も見えない。エラルのように角も無ければ、ユートのような獣耳やしっぽもない。かといって、サラのように耳が尖っている訳でもない。だが、命司にはその男の貌？？特に、抜け目なく常に値踏みをしているかのような眼差しが気にかかった。
（十中八九、マトモなヤツじゃねぇな……）
居酒屋のバイトで、何度か目にしたタイプの人間。ヤクザやヤンキーなど、それとすぐに分かるタイプではないが、自分達でやっている振り込め詐欺なんかの話を悪びれもなく、むしろ自慢げに話すタイプだ。当然ながら、命司は慎重にポーカーフェイスで気構える。すぐに食いつくような事はしない。
だが、
「はい！　何か知ってるんですかっ？」
傍らで、見事に入れ食いした世間知らずがいた。
（おお～い……？）

一先ず胸中でツッコんでおく。
（まぁ、俺がしっかりしてれば済む話か。イザとなれば言霊もあるしな）
そこまで考えて、命司は右手で顔を覆った。サラにはあまり効き目がなかった事を思い出したのだ。しかしそれでも隙を作ることくらいできれば、エラルと連携して対処することも不可能ではないだろう。
だが、エラルに視線を送ると、その必要もない事がすぐに分かった。エラルが背中に固定していた戦斧を外したのだ。
持ち主の背丈の三分の二程もある長さの柄。半月型の鋭利な刃を柄の先端両側に配置したそれは、人間の頭部が丸々隠れてなお余裕がある。そんな巨大な大斧を、しかし少しも苦にせずエラルは構えた。
（すげぇな……俺、コイツ怒らせないようにしよう）
感嘆と共に、命司は思わずそんな事を考えてしまう。
「あれは大事な品なんだ。もし、今すぐ返してくれるなら、許してあげるよ」
それは、『交渉』というよりも『威圧』に過ぎないのだろう。エラルは、これまでの頼りなげな表情はどこかに消え去り、代わりに怒りの感情が顕になっている。
そうしてエラルが男と相対している隙に、命司もまた退路を断つ様に、男の後ろへと移動する。
二対一。エラルの戦士としての実力は分からないが、少なくとも数の上では有利だ。あとは男がどう出るか、だが。
「んだよ、そんなこえーカオすんなって。返して欲しいなら、返してやってもいいぜ？　ただし、それ相応の金額でな」
わざとらしく首をすくめ、男は困ったように微笑った。
（コラコラコラ、何ナメた事言ってんだ？　このオッサンは）
盗品を、元の持ち主に売りつける。盗まれた事自体がマヌケな話だとして、その対価だというなら？？そんな理屈がまかり通るのな

ら、この世界の治安は相当に悪い。日本に住んでいた時のような感覚で事に当たれば、命が幾つあっても足りないだろう。が、それはそれ。それがこの世界の流儀であるのなら、命司には何も言う事はない。しかしその上でなお、個人的には「それってどうよ？」と言いたくもなる。

だからこそ命司は、ここは敢えて口を出さない事にした。それよりも、男の一挙手一投足を見逃さない方が賢明だ。

エラルもまた、男を睨みながら口を開く。

「……金額は？　いくら欲しい？」

「そうだな、その辺は頭と相談だ。物分りが良くて助かったぜ」

言いつつ、男は首を捻り、後ろに立つ命司に視線を送った。

（なんだ……？）

命司を一瞥した男の目は、確かに微笑っていた。まるで、男にとっては命司こそが財宝であるかのように。

男はすぐに視線をエラルに戻すと、口を開いた。

「だが条件がある。アンタと、そうだな、助け呼びに行かれちゃ困るから、ツレの兄ちゃんの二人だけで来い。でなきゃ、この話はナシだ」

「オイオイ、ナメんなよ？　テメェぶちのめして、吐かせるって手もあるんだぞ？」

命司は思わずそう言ってしまった。どう考えても、男の提案はワナ以外の何モノでもない。ノコノコついて行けば、囲まれて殺されるか、そうでなくても虜にされるのは目に見えている。

しかし、ケンカの経験など数えるほどしかない命司に、言葉通りの実力はない。実力行使では、結局エラル頼みになってしまう。だが、頼みのエラルは男の言葉で逡巡している様子だ。形見の品？？それは掛け替えの無い物の筈だ。そう簡単に答えが出せるものではないだろう。なら？？

（……言霊使って吐かせるか？）

逡巡するエラルを見ながら、命司はそんな事を考えた。だが、ど

うしてもサラの一件で萎縮してしまう。
問題は幾つかある。言霊が効いたとして、全てを話す前に正気に戻ってしまったら。
全く効かない可能性だってある。
最悪なのは中途半端に効いたとして、男が言霊の耐性を持ってしまうという事だ。命司の姉のように、命司がいくら言霊を使おうとも、『言霊が来る』という気構えをされてしまえば、一切通用しないのだ。言霊とは、意識の外から相手に働きかけるものなのだから。
エラルは、命司に視線を送ってくる。当惑し、どうしていいか分からない。そんな視線。しかし、それでもエラルの目は、ペンダントを諦めたくないと訴えている。
（命あっての物種、って言うけどな……）
まだ、たった半日の付き合いでしかない異境の友人。だが、そんな短い時間の中でも、エラルはいつの間にか命司の中で、大きな存在になっていた。いいヤツ??そう、いいヤツだ。王族という立場に生まれ育ち、色々と問題を抱え、それでも他人を認めて受け入れる、大きな度量を持っている。世間知らずな所もあるが、命司の立場を理解し、属性宝珠を与えてくれた。
ここで引き止めて、命を助ける事もできる。だがそうなれば、ペンダントは二度とは戻らない。自分の命はいいとしても、その事によって、やはりエラルが困る事になるのなら??
様々な考えと、色々な思惑が脳裏を巡る。葛藤は苦手だ。面倒になってくる。そして、最後にエラルに告げた、自身の言葉が脳裏に蘇った。
??俺は、今日もらったこの属性宝珠の価値以上のものを、いつか絶対返してやる。……出世払いでいいなら……だけど??
命司は覚悟を決めた。ここで返せないなら、この先も返せない。
エラルは命司がいなくても、きっと命を賭して取り返そうとするだ

ろう。そういった目をしているから。
「エラル。ペンダントは、どうしても諦めたくないよな？」
「……うん」
命司の問いに、エラルは力強く頷いた。
命司はそれを見ると、エラルの傍まで歩いていく。
「ラスク、もう全部食った？」
「……え？　いや、まだあるけど……そこに」
男を警戒しつつ、エラルは顎先で指し示す。エラルが座っていた場所に、その袋はあった。
「ん、じゃあ、食いながら行くか」
命司は呟くと、袋の中身を全て取り出した。残り五枚ほどのラスクが右手の中にある。空を見上げると、そろそろ暗くなり始めたそこには、鳥達が巣に戻っていくのが見えた。
「んじゃ行こうぜ。オッサン、案内してくれ」
言って、命司は袋を投げ捨て、エラルの肩を叩く。
エラルは一瞬、投げ捨てられた袋を見て何か言いたげだったが、しかし何も言わずに構えを解いた。が、斧は背中に戻さず、肩に担ぐ様にして右手に持った。
「こっちだ」
男が歩き始めると、命司とエラルはその後についていく。
「エラルも食うか？」
「ううん、ボクはいい」
「そっか、んじゃ、俺が全部食う」
命司は取り敢えず一枚を指先に出して、口元を隠すようにして食べ始めた。
「……キミがいて、心強いよ」
エラルは命司の様子を一瞥し、クスリと微笑った。

三章　盗賊団とその頭目　０３

◆　◆　◆

ダ＝インの都の中にも、物資を集積する倉庫街がある。およそ半数の物資は市民の生活のために使われるが、残りの半数はダ＝インの存在意義？？四方の国家が共同で出資する世界最大の研究機関『国際共立大学院』と、そこに付属する各種機関の活動によって消費される。

その倉庫街は、堅牢（けんろう）なレンガ造りの建物が、まるで一枚の壁のようにひしめき合う地区でもある。一つ一つが独立した建物でありながら、隣の建物との隙間（すきま）は、人ひとりがやっと通れるくらいの広さだ。

壁を成す倉庫群の一角、その中の一つに、命司とエラルは案内された。

二人が中に入ると、両開きの分厚い木製扉が閉められ、太くて長い貫抜が通される。それは、そこに待機していた見張りと思われる男達二人がかりでの仕事だった。

（……重そうだな……俺一人じゃ動かないかも）

完全に閉じ込められる形となったこの状況に、命司は嫌な汗が頬（ほほ）を伝うのを感じた。

夕暮れ時という時間もあり、中は暗闇（くらやみ）と言える暗さだった。明かり取りの窓は倉庫の上部に幾つかあるが、そこから射（さ）し込む光も既（すで）に弱く、闇を照らすまでには至らない。それでも微かに分かるのは、倉庫は中二階のある大きな建物だという事と、一階には大樽（おおだる）がひしめき合い、中二階の様子は入り口付近からでは良く分からないという事。それから、入り口から入って右手の方に、その中二階への階段があるという事だった。

「……ダグラス。なんだその小僧は？　秘法師みたいな格好をしているな」
不意に、闇の奥から声が聞こえた。渋さを感じさせる男の声。声の質感から推測すると、三十代半ばくらいに思えるが、姿が良く見えないこの状況では、それは憶測にしか過ぎない。だが、抜け目のない印象を与える声だと命司は思った。
「なに、ちょっとしたオマケでね。ただの一般人。鍵の持ち主の親友だとよ。下手に通報されても嫌だったんでね。一緒に連れてきたってワケさ」
（……ただの一般人？　親友？）
男？？ダグラスの言葉に、命司はどこか違和感を覚えた。『親友』。確かにエラルとのやりとりを聞いていれば、そんな印象を持っても不思議ではない。だが、どうして『友達』ではなく『親友』なのか。傍から見て、『友達』と『親友』の垣根はどう判別できるだろうか。『秘法師みたいな格好』という言葉に対し、『ただの一般人』と即答したのはどうしてなのか。それは、どこかで『観察』していたからではないのか。『ペンダントを探している連中』の存在をどこかで耳にしたから、逆に『その連中を探し出して様子を見ていた』という事なのではないのか。
だとすれば、ダグラスというこの男は、とんだ食わせ者だ。それは、まずは命司たちにとって。そして、この盗賊の仲間たちにとっても。
「ならいいがな。こっちに来い」
倉庫の奥から、そんな声が聞こえた。先程よりも、遠くから響いた感のある声。それは、声の主が移動した事を示している。
目が少し闇に慣れ、どうやら左右に並んだ樽と樽の間に、倉庫の奥へと続く通路がある事が分かる。狭い通路だ。そこに誘い込まれては、いよいよエラルに不利となる。まだ入口付近の広い場所の方が、大斧を使うエラルにとっては有利なはずだ。
命司はエラルの傍に寄り、耳打ちした。

「俺が確認してくるから、絶対奥に行くな。何があっても、ここで待機してろ」
「でも、それじゃメイジ、キミが」
「俺は大丈夫だ。ここに連れてきてやるから。その後は任せる」
エラルもまた闇に慣れてきているのか、命司の目を見据えて頷いた。
「俺は持ち主の代理だ。まだお前たちを信用してない。だから、まずは現物を俺に見せてくれ。話はそれからだ」
命司は、倉庫の奥に向かってそう叫んだ。
刹那、忍び笑いが聞こえてきた。
一つだけではない。幾つもの笑声が、それこそ倉庫全体から聞こえてくる。反響もあるだろう。だが、盗賊は明らかに複数。それも、十人以上いるのではないかと思われた。倉庫の奥から、頭上から、至る所から嘲るような忍び笑いがもれ聞こえてくる。
シュリ……。
シュリ……。
シュリン……。
笑声の中に混じり、微かに聞こえてくる響き。命司の緊張が高まった。その音には覚えがある。居酒屋のバイトで以前聞いた音だ。ヤクザと地元のチンピラが、店の中でケンカを始めた時、ビール瓶を手にしたチンピラに対して、ヤクザが立てた音。いわゆる『ヤッパ』を白鞘から抜いた音だ。
命司の行く先には、無数の鋭利な刃が待ち受けているという事である。
（……俺、マジで死ぬかも……）
そうは思ったが、ここで踏ん張れば名も上がる??かもしれないし、死んだとしても、あの元の世界で生きていくよりはずっとずっと楽だと思う。そういう意味では、居酒屋のバイトを思い起こさせてくれたのには感謝できるかも知れない。
（刺すなら刺せよ。その代わり、言霊で何人か道連れにしてやる）

そう考えながら、命司は無理やり自分を奮い立たせた。言霊に自信がある訳ではない。が、それでも虚勢を張る根拠にはなる。

命司はダグラスに促され、樽の間の狭い通路を奥へと進んでいった。両側に立ち並ぶ木製の樽。一歩進む毎に、その左右の樽の壁の狭間に人の気配を感じた。そして??

「止まれ」

そんな声が耳に届いたと思った刹那、不意にその人物が目の前に浮かび上がった。光源は、手に持ったカンテラ。その中にはユートの家で目にした、光る石が入っている。

頭目は、まだ若い??精々、三十代前半くらいに見える男だった。金髪のウルフカットと、その精悍な顔立ちが野性味を感じさせるが、しかしそれに反し、鼻に軽くかけているレンズの小さな丸眼鏡が、知性と、そしてどこか高貴さをも滲ませていた。

「……マヌケなツラだな。西の国の、どこ出身だ?」

嘲る様に、頭目はそんな事を訊いてくる。

だが、命司は余計な言葉を交わすつもりなどない。相手の正体が分からない以上、余計な会話は命取りだ。

「アンタにゃ関係ないだろ。現物を見せてくれ。取り引きにならないぜ?」

「……つまんねぇ野郎だな。黒い瞳に黒髪なら、西海岸のどこかか。低能な貧乏人どもの吹き溜まりだ」

嘲笑と共に頭目が言うと、背後の闇からも同様の忍び笑いが聞こえてきた。

(あ〜、この世界にも、そういうのがあんのな?)

思わず命司は呆れてしまう。と同時に、祖父の言葉が脳裏に蘇った。

??人はな? 自分の下に誰かがいないと気が済まんのよ??

命司にとっては新世界である筈のこの異境。しかし、『人』の営みがある限りは、どうにも逃れられない事なのかも知れない。そう思うと、急に身近に思えてくる反面、ウンザリもしてくるというも

のだ。
「ああ、低能でもなんでもいいから、さっさと見せてくれ。俺は早く解決して、家帰ってメシ食いたいんだよ」
「……フン、ガキの割に、からかい甲斐のない野郎だ。……これだ」
言って、頭目は上着のポケットからそれを出した。卵型で、最長部が指一本分くらいの大きさの黒い玉に、素朴な組紐が通されている。玉の表面には、確かに戦斧に見える刻印が在った。
（レプリカ……って可能性は、どうだろうな……？）
「本物だって証拠は？」
命司がそう訊くと、
「……あ？　こんなもん、どうやって複製すんだ？　黒曜石なんかな、そうそうこんな彫刻できる代物じゃないだろ？　ったく、これだから素人は……いや、西海岸の野郎だからか」
言って、再び頭目は嘲笑する。
（西海岸の人達、すみませんねぇ……）
元々がこの世界の住人ではない命司にとって、頭目の的外れな罵倒に対して特に悔しさは感じないのだが、しかしむしろその罵倒のネタにされている人達には、非常に申し訳なく思ってしまう。
「まぁいいさ。本人に確認してもらうのがいいだろ。俺じゃやっぱり良く判らん」
「……何しに来たんだ？　お前」
命司の言葉に、頭目は呆れ顔を見せる。
「じゃあ、それ持って来てくれ」
「嫌だと言ったら？」
「取り引きはナシだ。そんだけの話」
「……ふっ……くくくく……」
話の流れに任せて命司が告げると、頭目は急に笑い始めた。
「めでたいヤツらだな。買い手はもういるんだぜ。その御仁は、品物と持ち主をセットでご所望だ」
頭目の一言で、命司は絶句した。

（うお～……俺、どんだけの大事件に巻き込まれてんだよ？）
軽い目眩を感じ、命司は微かにふらついた。一応できるだけの事はするつもりでいるが、この流れは結局、ユート頼みになりそうな気がする。
ひとまず菓子の袋を落とした場所から、この場所の付近まで定期的に菓子の破片を落としてきたのだが、それに気づいてくれるかどうかは微妙な所だ。鳥や犬猫にでも食われている可能性は高いし、そもそも気付かない可能性だってある。
あとは、騒ぐだけ騒いでどうにかなるか、ぐらいだが、その上で、命司はともかくエラルまで痛い目を見る可能性だってある。
（命取らなくたってよ、目ぇエグるとか、色々あんだぜ？　イヒヒヒヒヒ……とか言っちゃいそうだもんな、コイツら）
無法者の無法者たる所以は、何をするか分からないところだ。だからこそ、一度きりかもしれない『言霊』を使う機会を、大切にしなくてはならない。
命司は精神を集中させた。いずれにしろ、今いるこの場所から、命司も入り口近くまで移動しなくてはならない。エラルを逃がすにしろ、エラルは多分、自分一人で逃げる事を良しとはしないだろうから。
なら、頭目を言霊で誘導し、その先はそこでまた考える。臨機応変にだ。頭目が油断しているなら、ペンダントを奪って逃げるもいいだろう。あるいは、エラルまでが標的だというのなら、エラルと共に一時撤退して衛兵と協力し、シラミ潰しに探すのもいい。
命司は再び頭目と視線を合わせた。いずれにしろ『今が使い時』。そう思った。
「……あのさ……」
「……まぁ、いいか。行ってやろう。行け」
命司の言葉を遮り、頭目はそう促した。
「あ、ああ」
返答し、来た道を振り返る。

（ラッキー！　ここで使わないなら勝機はある！　バカめ！　俺をナメるんじゃねぇ！）
勝利を確信してそう思った刹那、
「いてっ？」
命司は両腕を無理やり後ろに回された。と同時に？？
腰の上あたりで両腕が固定される。両の手首を周回する、刺すように冷たい感覚。その感覚に、命司は覚えがある。
「……あの、アンタ秘法師？　黒の？」
「これで分かんねぇなら、お前は本当に低能だ。さっさと歩け、このマヌケ」
声と共に、今度は首に腕を回される。そして、氷とは違う冷たい感触が、左頚動脈あたりに宛てがわれた。
「自分の立場、理解したか？」
「ええ、はい、もう充分に」
滝のような涙を流しながら、命司は自分の浅慮を悔いた。だがそれでも、エラルと合流できれば、まだ勝機はあるかもしれない。
「メイジ！」
樽の間の通路から出た所で、エラルの叫びが響いた。エラルの傍にはダグラスがいるが、まだ睨み合っている状況だ。
「はいはい、鍵の持ち主さんよ。大人しく武器捨てな。コイツ親友なんだろ？」
「卑怯者！」
頭目の行動に、エラルは怒りを露　にした。だが、そんなエラルの気持ちを嘲笑う声が周囲からもれ聞こえる。
「エラル、武器捨てんなよ。お前が頼りなんだから」
「はっ、このクソガキ、度胸だけは大したもんだ。でもな……」
命司の言葉を嘲る声が、背後から聞こえた。刹那、
（あつっ！）
命司は胸中で苦悶した。首に当てられた刃が、少し引かれたのだ。暖かいものが、命司の首筋を伝い落ちた。

「やめろ！　やめてくれ！」
エラルはもう一度叫んだ。そこにはもう、怒りではなく悲痛な色しか乗っていなかった。
（ここでお前に暴れてもらわないと、困るんだよ！）
命司は今にも武器を手放そうとしているエラルに、かぶりを振って見せる。同時に大きく息を吸い込み、声に力を乗せた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4670z/

マレビトの楽園

2011年12月29日09時53分発行